女子國文大綱　壹三

375.9
Hi-19
資料室

42284
教科書文庫
4
810
42-1930
20000
64438

資料室
昭和五年九月八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

平林治德編

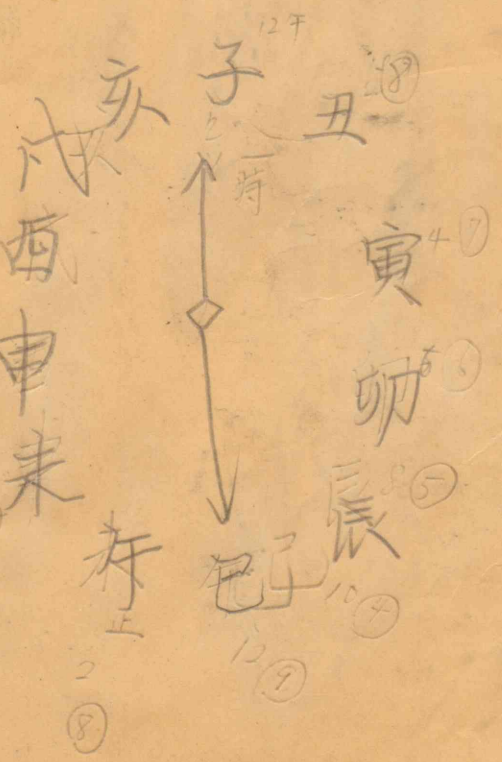
女子國文大綱

巻三

立川書店發行

広島大学
教
64438
図書

375.9
H19



國體觀念の涵養、國民精神の作興、國語の正しき理解と使用情操教育等、國語教授の使命は益、重大を加ふる秋に當りこれに重要なる關係を有する教科書が一夜作りの無責任なものであつてはならない事を痛感したのが本書編纂の動機であります。

材料に就いては權威ある作家の手になつたもので、純正なる國語の表現であり、之を玩味する事によつて、わが國の特質を悟り、われらの祖先、ひいては日本人たるわれ自らの本質を感得するに便なる作品を採り、一方常識を廣め、情操を高め全人間教養に役立つものを選ぶ事に苦心しました。

排列に就いては作品の本質を吟味して、相似たものを連續し、理會の順序を自然ならしめ、且讀後の印象を深からしめ、而もその間に變化あらしめるやう留意しました。

卷九・十に於ては江戸時代以前の作品を倒敍式に排列しその間に適當の現代文を挿入し卷末の日本文學年表と相俟つて、文學史の概念を得るに便ならしめました。

採擇の作品に就いては、出來るかぎり原作を尊重しましたが、教授上の用意から多少の改竄をした點は特に原作家の諒恕を仰がねばなりません。頭註に原本の刊行年月・發行所等を記したのは、出所を明確に示す一方、自修に便ならしめ、進んで研究を深める興味を起させ度い老婆心からであります。

美術史等の講義の無い中等學校に於て美的情操を養ふのは國語教授の重要な役目と考へますので、挿繪には特に意を用ひ、なるべく古今の名畫・彫刻・建築等の寫眞を挿入し、表紙の題箋は藤原行成筆と稱せられる御物倭漢朗詠集から拾字したものであります。

5、1 現
7 10 國 月

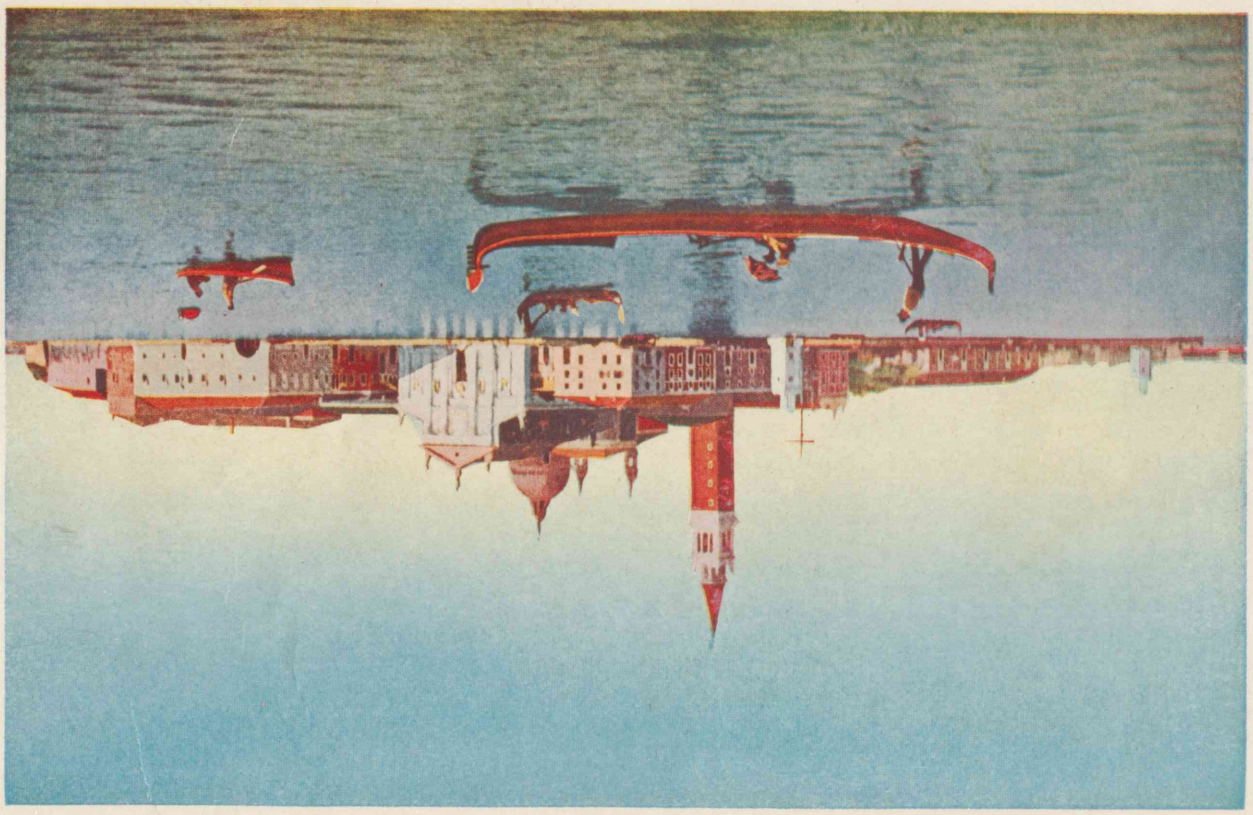
女子國文大綱　卷三

目次

一　孤島の行幸……（口語）……一
二　短詩三章……薄田泣菫　一〇
三　この春……（口語）……北原白秋　一三
四　お遍路さん……（口語）……荻原井泉水　一八
五　淨瑠璃寺への道……（口語）……和辻哲郎　二四
六　竹……（口語）……芥川龍之介　三四
七　文藝復興期の畫家……（口語）……木村莊八　四〇

八　感傷肖像……（詩）……佐藤春夫　五七
九　先生への通信……（手紙）……吉村冬彦　五九
一〇　曾呂利新左衞門……（文語）……湯淺常山　七三
一一　磯邊の小石……（口語）……相馬御風　七七
一二　青空……（詩）……千家元麿　八四
一三　兄弟の對話……（口語）……野上彌生子　八六
一四　伊豫すだれ……（口語）……里見弴　八九
一五　無數の寶石……（口語）……吉田絃二郎　一〇三
一六　熱帶の海……（口語）……島崎藤村　一〇四
一七　蜀山人の盆燈籠……（文語）……饗庭篁村　一一三
一八　山の木と大鋸……（口語）……志賀直哉　一一九

一九　和歌……一三一
二〇　蜃氣樓……（文語）……橘南谿　一三四
二一　椿……（文語）……幸田露伴　一三九
二二　夏小曲……（詩）……三木露風　一四二
二三　富士八湖……（口語）……下村宏　一四四
二四　精進より身延へ……（口語）……杉村楚人冠　一四八
二五　水國の秋……（文語）……德富蘆花　一五五
二六　父母の思出……（文語）……新井白石　一六三
二七　幼な正行……（劇）……坪內逍遙　一六九



（スエーデン）ヴァルナ

〈九、北海への通信〉

佐伯灣 大分縣南海部郡の東部に灣入する灣。

小笠原島 東京府管下、日本の南洋に在る一群島。大小七十餘の島嶼より成り、父島列島・母島列島・聟島列島の三部に分る。島廳所在地なる父島の二見港より東京へ五三六浬。

奄美大島 大島の古稱、鹿兒島縣大島郡

女子國文大綱　卷三

一　孤島の行幸

昭和二年八月上旬、佐伯灣沖の豐後水道に於て行はれた、我が聯合艦隊の戰鬪射擊演習を御親閲遊ばされる機會に、天皇陛下には總航程約三千海里、二週間に亙る海の御旅の中、往航には小笠原島へ、復航には奄美大島へ御立寄遊ばされた。兩島共に古來難航の離島と傳へられ、本土との交通少く、況して天皇の行幸などは未だ曾て一度も無く、この度

屬する島。大島群島中の主島、鹿兒島を南西に距る二〇〇浬。

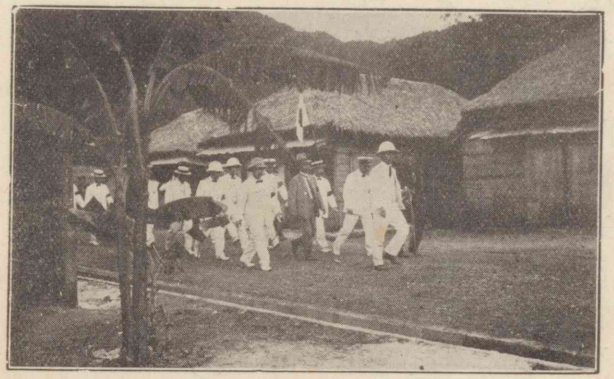
横須賀　神奈川縣。

扇浦御上陸

大村　二見港の北岸に位し、小笠原列島の首邑。島廳所在地。

の行幸は、實に我が國開闢以來最初のことで、兩島民の歡喜は非常なものであつた。

七月二十八日、横須賀軍港を後にした御召艦山城は、四隻の驅逐艦を從へ、二日の航程恙なく、三十日の朝肅々として二見港に入港した。檣頭高く掲げられた天皇旗は、紺碧に晴渡つた南國の空に翩翻として金光を放つて居る。やがて陛下は奉迎者の歡呼の裡に、大村埠頭に御上陸、珊瑚の清め砂に第一歩を印し給うたのである。



直に大村小學校に臨ませられ、校長の御案内で兒童の作品を御覽後、父島要塞司令部に臨幸、遠く邊境に在つて、我が國南門の守備に當つてゐる人々の勞を嘉し給ひ、次いで支廳に向はせられ、商品陳列館階上の御休憩所で、支廳長より島情を具さに御聽取あり、更に午後は御微行で歸化人村を訪はせられた後、聯珠山に分入らせ給うて、原生植物を御採集遊ばされた。

大村小學校では、畏くも歸化人兒童の「日本兒童」と題する作文に特に御眼を留めたまひ、校長に對し種々御下問あらせられたと承る。また島民心づくしの獻上品を御嘉納あらせられたばかりでなく、産業御奬勵の思召から、島の果物・

細工物などを特に御買上げ遊ばされたので、島民は今更ながら陛下の厚き大御心に感泣するのみであつた。翌三十一日の夜は、御旅情を慰め奉るべく沖中島民が舟を操つての提灯行列に、陛下も亦鬼燈提灯を打振り給ひ、艦上より御答禮遊ばされたといふ。かくて明くれば八月一日、薄絹の如き朝靄の中を、感激に滿ちた島民の萬歲聲裡に、御乘艦は徐々と白波を蹴つて、海上一路佐伯灣に向つて島を離れた。

小笠原支廳御退出

名瀨　大島の西北岸の大邑。

古仁屋　大島の西南側。

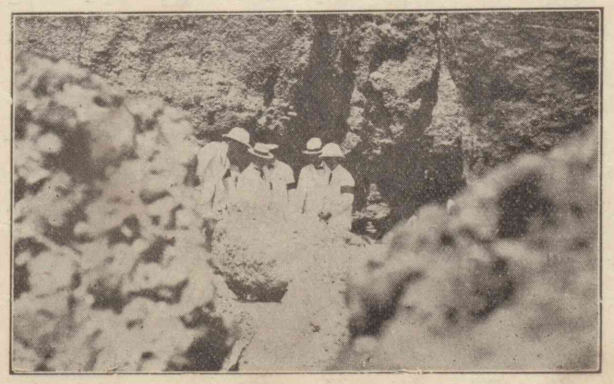
傳說の島、常夏の國、黑潮めぐる南海の離島奄美大島の民草が、天皇の行幸を初めて御迎へしたのは八月六日であつた。この日正午を稍過ぎる頃、陛下には、名瀨港の假棧橋より御上陸、週餘にわたる海上の御生活に龍顏一入御健かに拜せられた。大島支廳に臨幸の上、本島開發の功勞者や節婦某にまで拜謁を賜はつた後、各種物產の天覽を了へたまひ、豫め廳庭に用意した大島紬の製作を始めとして、黑砂糖・蘇鐵の澱粉製造、毒蛇の毒素採取等の實演を、いとも御興深げに御覽あらせられた。やがて名瀨小學校に臨御、大島島內二十餘校の兒童成績品を御一覽後、御歸艦の上、古仁屋に

高松宮殿下
宣仁親王、大正天皇第三皇子。

貨幣石御發掘

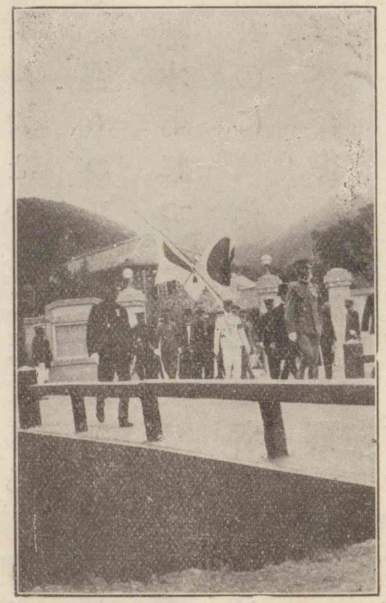
向はせられた。

去年高松宮殿下を御迎へした、幸福なる古仁屋の民草は、今また聖上陛下を御迎へして、重なる雨露の御惠に無上の光榮と感激とを覺えた。御召艦山城の入港は六日の黃昏時であつた。その夜は長蛇の如き島民の提灯行列を艦上から御覽になり、翌七日朝に至り、軍用棧橋より御上陸、要塞司令部に於て、國防の軍情を當局者より御聽取遊ばされた。續いて御徒歩のまゝ昨年の大暴風雨に大部分



父島小學校御退出

倒潰して、その修繕改築の未だ終らない小學校に臨御、兒童成績品を天覽あらせられた後、假校舍の一室に陳列せられてゐる諸種の產物や發見物などを御覽遊ばされ、一々係りの者に御質問などがあり、それより更に高千穗神社の境內なる御野立所から、港內四方の景色を御展望あらせられた上、御機嫌麗しく御歸艦、午後は艦上より青年團・在鄕軍人團の板付競漕を天覽、なほ島民の獻上品を御嘉納あらせられた。ついで御微行で水

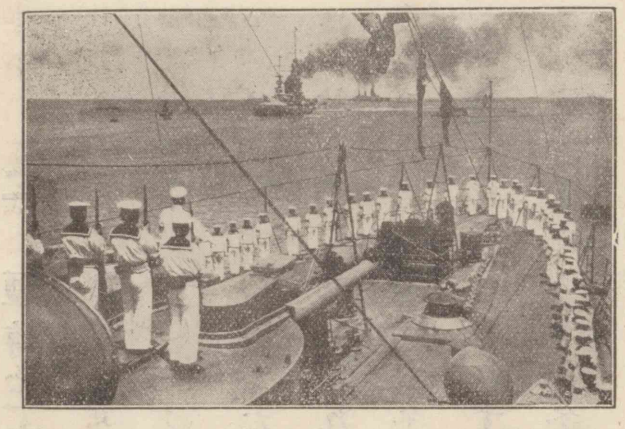


一　孤島の行幸

雷艇に召され薩川港内に成らせられ、國防の第一線を御視察、更に海底の動植物を御採集遊ばされた。御歸艦後、數多の標本參考品に就き、專門學者を御相手に御研究を續けさせられたといふことである。翌八日も、朝より陪從の各學者を召されて、貝類・海藻類・考古學・地質等に關する御採集品や標本等につき御研究を進められたが、陛下の御質問の細密なのには、その道の學者達も恐縮したさうである。午後は再び御微行で灣内を御一巡、ワシントン會議の結果工事中止のまゝなる砲臺などを御巡覽遊ばされた。

奄美大島御滯在中に、或は島民の教育資金に補助を賜はり、或は名瀬に古仁屋に、侍醫を遣はして數多の重病患者を

御召艦「山城」



診療せしめたまふなど、廣大無邊の御仁慈は到底筆紙の盡くす所でなく、聖恩に感泣し奉る者、啻に兩孤島の民草ばかりではないのである。

この日午後四時、御召艦山城は島民の奉送歡呼聲裡に、七百三十浬の長い海路を、一路横須賀へと向はせられた。濱邊に集ふ島民の眼には、感謝の涙が一杯に滿ちて、感激に震ふ萬歳の聲はいつまでもいつまでも、御召艦のあとに響き渡つてゐた。（大阪朝日新聞に據る）

薄田泣菫　名は淳介、明治十年岡山縣淺口郡連島町に生る。詩人。大阪毎日新聞社囑託。

二　短詩三章

薄田泣菫

冬の鳥

雪の降る日に柊の
あかい木の實がたべたさに、
柊の葉ではじかれて、
ひよんな顔する冬の鳥、
泣くにや泣かれず、笑ふにも、
えゝなんとせう、冬の鳥。

つばくろ

紺の法被に白ばつち、
いきな姿のつばくらさん、
お前が來ると雨が降り、
雨が降る日に見たらしい
むかしの夢をまた見ます。

猿

お山の猿が袈裟を着て、
門へ來たなら何とせう。
山のお寺の法師さま、
いらせられいと迎へます。
もしもお袈裟が綻びて、

尻尾が出たら何とせう。
町のお針を呼んできて、
仕立おろしをあげませう。

（泣菫詩集）

泣菫詩集
「子守唄」より。大正十四年二月、大阪毎日新聞社發行。

北原白秋
名は隆吉、明治十八年福岡縣柳河町に生る。詩人。

こゝ
神奈川縣足柄下郡小田原町。

お濠端
小田原御用邸のまはり、もとの小田原城。

大地震
大正十二年九月一日の關東大地震。

三　この春

北原白秋

こゝに移り住んでから、これほどに、私はしみじみとした、しかもまた明るい春らしい春に出逢つたことはない。

ただわづかに五六日しか他行しなかつたのに、歸つて見ると、小田原の町はもう櫻の眞盛りになつてゐた。ことにお濠端の並木などは、あの大地震に崩れつくした石垣の上から、殆ど根こぎになつて、滿開してゐた。ある枝などは、青

天神山
小田原驛の近くにある山。

春

濁りの水にその尖端がとどいたなりで、既に薄あかく匂ひこぼれてゐた。あるものはまた舊城の枯松や霜燒した鋒杉などと、横倒しに喰ひちがつたまゝで、而もおそろしく咲きしらんでゐた。

それよりもこの天神山を登つて、いよ〳〵私は春の闌けたのに驚かされた。傳肇寺といふ名ばかりのこのバラックの寺の墓地前の櫻も遲咲きの八重ながら、もうとくに盛りになつて井戸のそばのくづれた竹垣の上には、紅紫の蘇枋の

アネモネ Anemone

花が咲出し、うちの木兎の家とのさかひにはまた造花のやうに眞紅な緋桃の花が光りかがやいて、下垣の青い蕗の葉までも、かへつて色濃く引きたゝせてゐた。

私は家のはいり口の二本の棕櫚の根方に、紅い一輪のアネモネの花をも見つけた。

而も、それよりもまた私の目を驚かしたのは、家のまはりの孟宗林の楚々たる姿の薄黄であつた。いや、その下萌えの深い緑であつた。雨に濡れた白いなづなの花のむらがりであつた。

いや、まだ驚いたのは、吾が子の顔であつた。姿であつた。急に目立つてさかしく大きく見られたことであつた。

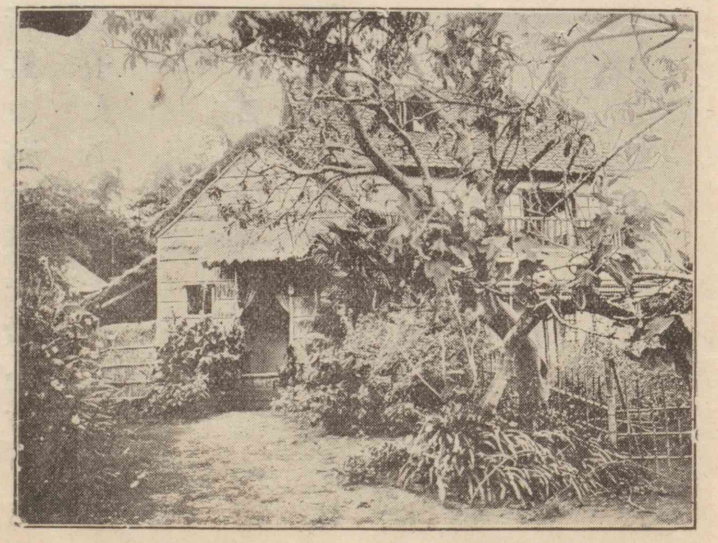
ムーンフラワー Moonflower

木兎の家

コスモス Cosmos

庭の花壇にはいろ〳〵の草の芽生えがひわれて來た。金蓮花・藿香薊・向日葵・雛芥子・ムーンフラワー、蒔けるだけ蒔いた野菜の二葉、それからひとり生えのコスモスや葉雞頭などは、もう足の踏場さへもないほど生えつめて來た。

窓の下の山吹にも、ちらちらと枝の深い方で黄色く綻ぶ花も見た。南天の實もいよ



いよ紅く濕つて見えた。

つい前の、隣の小藪には、實に新鮮な蒲公英が數かぎりもなく、朝ごとに咲いては、また寺の子たちに摘まれてしまつた。

この裏の別莊の丘にのぼると、そこらはもうつくしんぼの季節が過ぎて、代りに一面の杉菜が露を綴り、虎杖のやはらかな嫩芽、幼い御形蓬、見るもの踏むものことごとに私は更にみづみづしく、親しい隣の春を樂しまずには居られなかつた。

つい二三日前の夜には、ころ〳〵と蛙の遠音もきこえたやうであつた。

赤い鳥　少年雜誌の名。

ジアスターゼ　Diastase　澱粉醱酵素。消化藥。

季節の窓　「四月の言葉」。四九頁―五一頁。大正十四年五月、アルス發行。

私たちは鍬をとつて、あちらこちらの孟宗の根を掘返しては、まだ秀の黄色い幼い筍を探しまはつた。

出入りの魚屋が、今朝鯔の卵を持つて來た。私たちはそれを煮、とりたての鰺の刺身をつくらせては、新筍の五目飯に滿腹した。

かうしてまた、「赤い鳥」の兒童の詩の選をしたり、童謠を作つたり、紅茶をのんだり、コヽアを沸かしたり、蕎麥がきを頰ばつたり、じやがたら漬をたべたり、ジアスターゼを嚙んだりしてゐるのである。

さうして今夜もまた徹夜で勉强だぞと懸命である。

（季節の窓）

四　お遍路さん

荻原井泉水

りん〳〵といふ冴えた音が、遙かの山裾からこの山莊にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。

「お遍路さん」とは何といふ親しみ深い言葉だらう。四國八十八箇所に殘された弘法大師の靈場を遍歷して歩くのがお遍路さんである。併し、如何に信仰のためとは言へ、四國を一周することは日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として大抵の事ではな

荻原井泉水
名は藤吉、東京市の人、明治十七年生。俳人。

荻原井泉水

弘法大師
空海のこと。讃岐國の人、眞言宗の開祖。承和二年（一四九五）寂、年六十二。

いので、四國の代りに、この小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積得る事とされてゐる。「島四國」といふ言葉も出來てゐる。　島四國の遍路にしても、女の脚では、六七日かゝると云ふことである。

岡山から、若しくは高松から來るお遍路さんは、多くは船で土庄（とのしやう）港に着く。そこから發足して第何番といふ札所の順に參詣の道を辿るのである。　菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱をつるして、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、淋しいのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀の様な海の光を浴びながら、海に近い麥畑の中の道を辿

小豆島
瀬戸内海に在る小島にして香川縣に屬す。

つて行く。それは繪である。美しいことである。この山莊にまで聞えるりん〳〵と冴えた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。

お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑に、路を歩くのに好い氣持であり、又農業も比較的ひまな四月頃一番多く見受けると言ふことだ。この頃島に着く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡して來る。一體遍路といふものが、何時の時代から始まつたものかは知らないが、大師の敎門を弘くする上から言つても、各自の信念を厚くする上から言つてもよいことだと思ふ。そればかりではない。お遍路さんは到る處で愛せられる。又惠まれる。お遍路さ

ん同士も亦お互に遍路であると云ふことのために信賴する。又扶助する。是が實に善い事だと思ふ。未知の人達が道連になつて親しんで行く、路を敎へ合ひ、足らぬ物を足合つて行く。

お遍路さんが路傍の家に荷などを置けば、どの家でも喜んでくれる。決して紛失しないといふことだ。是は遍路としての誰もが、一つの眞實の道に繫がつてゐる

といふ意識から來るのだ。この道に參ずるには、知識も修養も資格も、そんなものは何もいらない。婆さんでも娘でも男でも子供でも、ただ一つの道を信ずる事に依つて、この尊い心持に一致することが出來るのだ。「南無大師遍照金剛」と讃仰する聲が出て來るのだ。是は實に美しい事だ。爭鬪と欺瞞とに滿ちた社會の中にあつて、信賴と扶助とに心を合はせて行き得る事ほど、美しい事が他にあるであらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてのみ美しいのではない。彼等が愛し合ひ信じ合ふ事に生きるが故に美しいのである。

而してこの事は獨り彼等お遍路さんの上の事のみではない。私達は皆人生の遍路である。銘々に自ら負はねばならぬ物を負うて、自分の名を書いた札を播散らしながら、自分々々の路を遍歷してゐるのである。しかも私達の周圍にはこのお遍路さんに見る樣な信賴と扶助とが行はれてゐるだらうか。私は思ふ、私達はこのお遍路さんに學ばねばならない、遍路といふ行事をのこした弘法大師の暗示を感じなければならない、而して人間の悉くがお遍路さんの心を心とするまでに到らなくとも、私達はまづお遍路さんの信と愛とを以て、人生を歩き度いものであると。

（山水巡禮）

山水巡禮
「山莊雜記」二二一頁―二二四頁。大正十年七月、聚英閣發行。

和辻哲郎　明治二十二年兵庫縣神崎郡福野村に生る。東京帝國大學文科出身。京都帝國大學助教授、思想家、評論家。

淨瑠璃寺　山城國相樂郡當尾村に在り。眞言宗の寺。天平初年行基の開基。

奈良坂　奈良市の北にある坂路。木津町より十八町。

五　淨瑠璃寺への道

和辻哲郎

今日は淨瑠璃寺へ行つた。晝すぎに歸れるつもりで、晝食の用意をいひつけて出掛けたのだが、案外に手間取つて、また案外に面白かつた。

奈良の北の郊外はすぐ山城の國になる。それは名義だけの區別ではなく、實際に大和とは氣分が違つてゐるやうに思はれた。奈良坂を越えるともう光景が一變する。道は小山の中腹を通るのだが、その山は薄赤い砂の極めて瘦せた感じを持つたもので、幹の色の美しいひよろ〳〵した赤松のほかには、殆ど木らしいものはない。それも道より

三笠山　奈良市の東にあり。

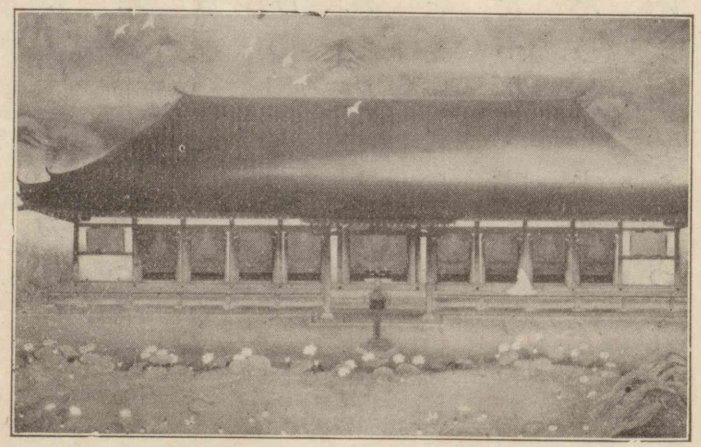
和辻哲郎

下の麓の方に所々群つてゐるきりで、あとは三尺に足りない雜木と小松が山の肌を覆ひ切れない程度でところ斑に山にしがみついてゐるのだ。さうしてその斑の間には、一面につゝじの花が咲亂れてゐる。――この景色は、三笠山や、その南の大和の山々には見られない。しかし、その乾いた、砂山めいた、禿山の氣分は、僕には親しいものだつた。かういふ所では、子供でも峰傳ひに自由に遊びまはれる。ちやうど今頃は柏餅に使ふ柏の若葉を、それが足りない時には、燒餅薔薇のすべすべした圓い葉を

集めて歩く時分だ。つゝじの桃色や薄紫も、賑かなお祭らしい心地に子供の心を浮立たせる。谷川へ下りて水いたづらをしても、もう寒くはない。じいじい蟬の聲が何となく心細さを誘ふまで、子供たちは山に融入つたやうになつて遊ぶ。――それは二十年前の僕の樂しみだつた。僕は故郷に歸つたやうな心持で、飽きずに車の上からこの景色を眺めてゐた。

この途の感じが、淨瑠璃寺へ行つてからも僕の心に妙に働いた。――といつても、淨瑠璃寺へすぐいつたわけではない。道はまだ大變だつた。山を出て里に出たり、それらしいと思ふ山をいつか通りすぎてまた山の間に入つたり、や

がてまた舊家らしい家のある綺麗な村へ出たり、――しかも雨上りの道のひどいでこぼこで、車に乘つてゐるのも閉口だつた。畑と山との美しい色の取合はせを車上で賞めてゐた僕達もとう〳〵我慢がしきれなくなつて、その狹い田舍道に下立つた。さうして若々しい櫟林の中を、穗を出しかけた麥畑の間を、汗をふき〳〵歩いて行つた。寺の麓の村まで來ると、小石のごろごろした危なつかしい急な坂を――それもどうかす



ると百姓家の勝手口へ迷ひこんで行きさうな怪しい小道だつたが――歩かねばならなかつた。本道の方は崖が崩れて、とても通れなささうに見えてゐた。――もつともひどく意氣込んでかゝつたわりには、急な坂は短くて、すぐ峰づたひの坦々たる道へ出た。それで安心して歩いてゐると、またこの坦々たる道がなか〳〵盡きさうもなくなつた。赤松の矮林の間には、相變らずつゝじが咲いてゐる。道傍に石地

淨瑠璃寺名所圖繪所載

右　同

藏の並んだ所もあつた。大きい竹藪の間に、人家の見える所へも出た。水の音が頻りに聞えて、いかにも幽邃な趣がある。あれこそ寺だらうと思つてゐると、それは水車小屋だつた。山の下から眺めた時、遙か絶頂の近くに見えた家がどうもこれらしい。もうそんなに高く登つたのかと思ふ。と同時に、一體どこまで登ればいゝのだらうと思ふ。やがて馬鹿に大きな岩が道傍の崖からはみ出てゐるところを

だらだらと上つて行くと、急に前が開けて、水田にもなるらしい麥畑のある平地へ出た。村がある、森がある、小山があ
る。こんな山の上にあるだらうとは豫期しない、いかにも長閑な農村の光景だつた。淨瑠璃寺はこの村の一隅に、この村の寺らしく納まつてゐた。これも豫想外であつた。
しかし何ともいへぬ平和な、いゝ氣持だつた。――こんな風でもう奈良坂まで歸つてゐていゝ時刻に、やつと淨瑠璃寺についたのだ。

さてこの山村の麥畑の間に立つて、寺の小さい門や白い壁や、その上からのぞいてゐる松の木などの野趣にみちた風情を眺めた時に、僕はそれを前にも見たといふ氣がして

淨瑠璃寺吉祥天女

ならなかつた。門を入つて最初に目についたのは、本堂と塔との間にある、寂しい池の水の色と葦の若芽の色とであつたが、その奇妙に澄んだ、濃い、冷たい色の調子も、それが今初めて氣づいた珍しいものであつたにも拘らず初めてだといふ氣がしなかつた。背後に山を負うて、いかにもしつくりとこの庭にはまつてゐる優美な形の本堂さへも、――また庭の隅の小高いところに、朽ちかゝつたやう

な色をして立つてゐる小さい三重の塔さへも、僕には初めてではなかつた。そんな馬鹿な事がある筈はない。しかし堂の前の白い砂の上を歩きながら、僕はこの漠然たる心持から脱することが出來なかつた。

もし前世の記憶といふものが、いや、今はさういふ問題に觸れまい――ただ、かういふ事を考へて欲しい。淺い山ではあるが、とにかく山の上に、下界と切離されたやうになつて、一つの長閑な村がある。そこに自然と抱合つて優しい小さな塔とお堂とがある。心を潤すやうな透きとほつた可愛らしさが、すべての物の上に一面に漂つてゐる。それは近代人の心には、餘りに淡きに過ぎ平凡に過ぎる光

景だが、しかも我々の心が和らぎと休息とを求めてゐる時には、祕めやかな魅力を以て我々の心の底のあるものを動かすのだ。桃源の夢想――それが淨土の幻想と結びついて、この山上の地を擇ばせ、この池のほとりのお堂を建てさせたのかも知れないと思はれるが、――それを我々と全然縁の無い昔の逸民の空想として一個の價値だも認めてゐなかつた我々が、眞實はなほその夢想に共鳴するあるものを持つてゐる、――それは僕には驚だつた。さうしてその心持を省みて檢した時に、僕はかつて自分が桃源に住んでゐたのだといふ事を發見した。日頃氣附かないこの事を、今日の旅で氣附いたのだが、僕には面白いのだ。（古寺巡禮）

芥川龍之介
東京の人。東京帝國大學文科出身。小說家。昭和二年歿、年三十六。

あまがっぱ。

六　竹

芥川龍之介

或雨あがりの晩に車に乘つて、京都の町を通つたら、暫くして車夫がどこへつけますとか、旦那どちらへつけませうかとか、何とか云つた。どこへつけるつて、宿へつけるのにきまつてゐるから宿だよ、宿だよと桐油のうしろから、二度ばかり聲をかけた。車夫は、その御宿がわかりませんと云つて、往來のまん中に立止まつたまゝ動かない。さう云はれて見ると、自分も急に當惑した。宿の名前は知つてゐるが、宿の町名は覺えてゐない。しかもその名前なるものが、甚だ平凡を極めてゐるのだから、それだけでは、幾ら賢明な

藪の圖

芥川龍之介

車夫にしても到底滿足につける事は出來ないであらう。

困つたなと思つてゐると車夫が桐油をはづして、「この邊でないですか。」といふ。提灯の明りで見ると車の前には竹藪があつた。それが暗の中に萬竿の青を列ねて、重なり合つた葉が寒さうに濡れて光つてゐる。自分は大へんな田舍ぢやないよ、横町を二つばかり曲ると、四條の大橋へ出る所なんだと說明した。すると、車夫が呆れた顏をし

て、「こゝも四條の近所ですがね。」といつた。そこで、「へえ、さうかね、ぢやもう少し賑かな方へ行つて見てくれ、さうしたら分るだらう。」と、まあ一時を糊塗して置いた。

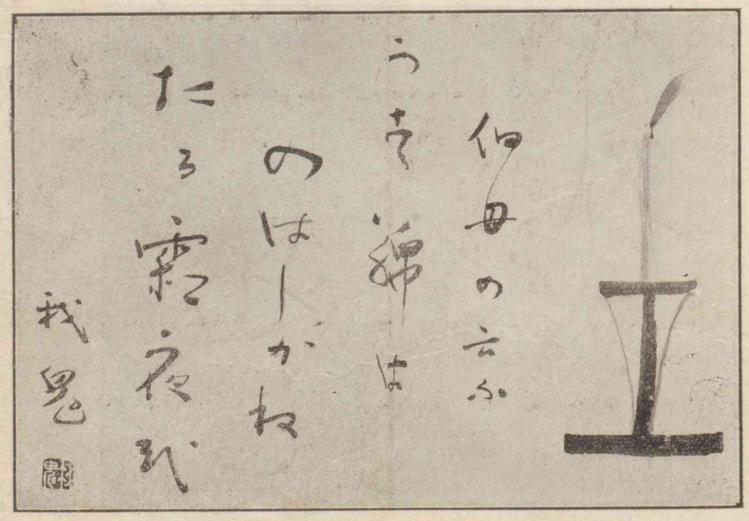
所がそのまゝ車が動き出して、とつつきの横町を左へ曲つたと思ふと、突然歌舞練場の前へ出てしまつたから奇態である。それも丁度都踊の時分だつたから、兩側には祇園團子の赤い提灯が、行儀よく火を入れて並んでゐる。自分は初めてさつきの竹藪が建仁寺だつたのに氣がついた。が、あの暗を拂つてゐる竹藪と、この陽氣な町とが、向ひ合つてゐると云ふ事は、どう考へても嘘のやうな氣がした。その後、宿へは無事に辿りついたが、當時の狐につまゝれたや

建仁寺　京都市下京區小松町にあり、臨濟宗建仁寺派の本山。

龍之介筆蹟　伯母の云ふうす綿はのばしかねたゝ霜夜哉　我鬼

うな心もちは、今日でもはつきり覺えてゐる。……

それ以來自分が氣をつけて見ると、京都界隈にはどこへ行つても竹藪がある。どんな賑かな町中でも、これぱかりは決して油斷が出來ない。一つ家並を外れたと思ふと、すぐ竹藪が出現する。と思ふと、忽ち又町になる。殊に今いつた建仁寺の竹藪の如きは、その後も祇



園を通りぬける度に、必ず棒喝の如く自分の眼前へとび出して來たものである。……

が、慣れて見ると、不思議に京都の竹は少しも剛健な氣がしない。如何にも町慣れた、やさしい竹だと云ふ氣がする。根が吸ひあげる水も、白粉の匂がしてゐさうだと云ふ氣がする。もう一つ形容すると、初から琳派の畫工の筆に上る爲に、生えて來た竹だと云ふ氣がする。これな

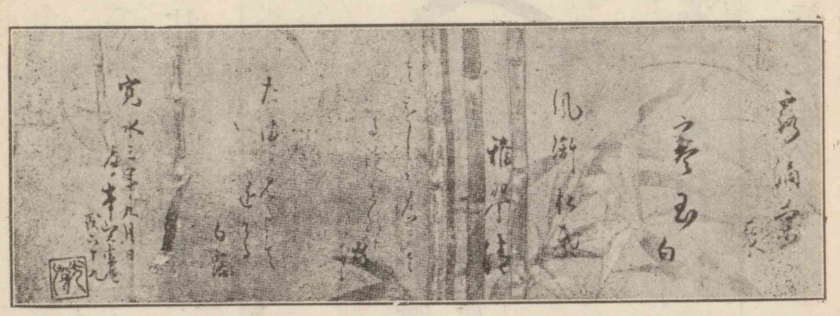
梅の圖
尾形光琳筆

琳派
尾形光琳の畫派。光琳は意匠卓拔、設色豐富、裝飾的の畫を描く。享保元年（一三七六）歿、年六十前後。

光悅
本阿彌光悅。刀劍鑑定・蒔繪・書畫を能くす。寛永十四年（一二九七）歿、年八十一。

光悅筆竹の圖

芥川龍之介全集
第六卷「京都日記」二〇〇頁―二〇二頁。昭和三年八月、岩波書店發行。



ら町中へ生えてゐても、勿論少しも差支はない。何なら祇園のまん中にでも、光悅の蒔繪にあるやうな太いのが二三本、玉立してゐてくれたら、猶更以て結構だと思ふ。

裸根も春雨竹の靑さかな

大阪へ行つて、何か書けと云はれた時、自分は京都の竹を思ひ出して、こんな句を書いた。それ程數多い京都の竹は、京都らしく出來上つてゐるのである。

（芥川龍之介全集）

七　文藝復興期の畫家

木村　莊八

往古の大帝國東ローマは都をコンスタンチノープルに移して榮えて居りましたが、それから千百二十三年目に遂に滅亡の悲運に逢ひました。帝都コンスタンチノープルが陷落して國が滅亡すると、この地のギリシヤ系藝術家・學者等は、續々戰亂を避けて落着をさがす爲にイタリア半島に逃れて來ました。

木村莊八の顔

ニコラ、ピサノ
Nicola Pisano
(1206—1278)

當時——十三世紀の初め、イタリアにニコラ・ピサノといふ賢い彫刻家が居りました。彼は正直に自然に就いて勉強をして、彫刻の祕密を次第に會得して居りましたが、或日のこと、近くのお寺の一隅においてある、ほこりだらけの古代彫刻を見て、まるで目の前に雷の落ちたやうに、烈しく心を撃たれました。彼はその彫刻を美しいと思ひ、美しいものとは卽ちかういふものの事だといふことを一眼見て忽ち全身に感じたのです。藝術の極意を悟つたのです。

そのピサノの見た古代彫刻といふのは、ギリシヤ・ローマ時代のもので、以前から長らくお寺の隅に置かれてあつたのです。それを見た人はピサノの前にも無論何人もある

のです。唯一人も、それを心から「美しい」と思つて見た人は、ピサノの前には、その彫刻を作つた人の他には、なかつたのです。

彫刻が惡いのではなしに、それを見る人の眼が惡いのです。彫刻には美の生命が籠つてゐたのですが、見る人の心にそれのわかる賢さがなかつたので、それまでその彫刻は何人の眼に見られても寂しく冷たく横たはつて眠つてゐました。始めて心あるニコラ、ピサノに見られて、恐らく千年の以上も埋もれて知られずにゐた美の生命は生動しました。それを眞心こめて作つた人の不滅の精神はピサノに再び生返つたのです。

これがルネッサンスの話のはじまりであります。ルネッサンスとは文藝美術が再び盛に生動して榮える事をいひます。ギリシヤ・ローマの時代のやうに、再び文藝美術が潑剌として人々の心に生き、盛大に行はれる事をいひます。

ピサノの心にお寺の一隅の古代彫刻が生返つたやうに、

ルネッサンス Renaissance　文藝復興

エヂプト繪畫（狩獵、テーベ墳墓壁畫）

西暦十何世紀といふ世界の年齢の上に、紀元前何世紀といふ時を隔てた古代の精神が生返るのです。いひかへると「美」が生返つて再び人々の中に働くのであります。それをルネッサンスといひます。

チマブエ筆　マリア

さていよ〳〵絵の方のお話ですが、ギリシヤの絵はよく傳はらず、ローマは餘り絵に卓越せず、大昔のものでは唯一種獨特なエヂプト絵畫が目立つて我々にのこるのですが、これもどつちかといへば彫刻に敵

チマブエ　Cimabue　(1240—1302)

ジオット　Giotto　(1266頃—1337)

フラ、アンジエリコ筆　天使

ひません。世界に繪らしい繪の起るのは、全くルネッサンスのイタリヤからともいへるのです。

前にいつたニコラ、ピサノの時代卽ち十三世紀から十四十五世紀にかけてのルネッサンスの過渡期にはすばらしい文藝家・美術家が相ついで現れました。

畫かきの方ではチマブエ・ジオットといふやうなルネッサンス最初の二大家をはじめ、ラスキンといふ偉い批評家を

ラスキン　Ruskin (1819—1900)　イギリスの文學者、思想家、美術批評家、改良社會論者。

フラ、アンジエリコ　Fra Angelico (1387—1455)

サンドロ、ボッティチェリー筆　ユーディットの歸る　サンドロ、ボッティチェリ　Sandro Botticelli (1447—1515)

して「子供らしい藝術なるが故に美しい。」と云はせた僧侶のフラ、アンジェリコ、それまでの誰もが同じやうにとつてゐた材料のキリスト教からはなれて昔のギリシヤのお話をかいて、ある人々から異端視されたサンドロ、ボッティチェリ等が出ました。又油繪の發明をしたネーデルランドの今のベルギーのフアン、アイクといふ兄弟の大畫家もルネッサンスの氣をはいた時代人です。つづい

ギルランダヨー　Ghirlandajo (1449—1494)

ベロッキオ　Verrocchio (1435—1488)

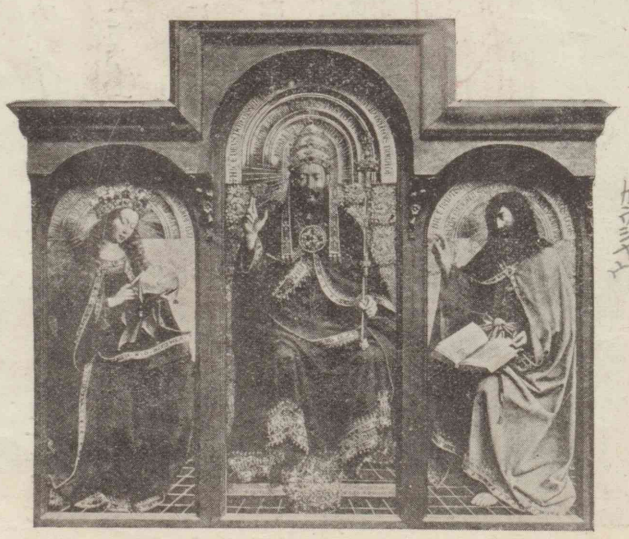
フアン、アイク兄弟作聖羊禮拜圖

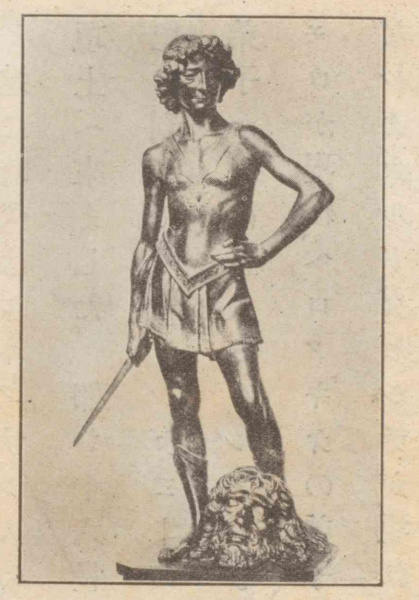
ミケルアンジエロ　Michelangelo (1475—1564)

レオナルド、ダ、ビンチ　Leonardo da Vinci (1452—1519)

てイタリアにはギルランダヨーと云ふ高尚な畫家が出ました。彫刻家のベロッキオも健全な繪をかきました。此の二人からはそのお弟子に二人の大天才が現れます。

遂に時代はルネッサンスの頂上へ來ました。即ち十六世紀に到つてギルランダヨーの弟子からは巨人ミケルアンジエロが現れ、ベロッキオの弟子からは、貴い思想の泉のやうなレオナルド、ダ、ビンチが現れました。





ペロッキオ作ダビデ

ギルランダヨー筆聖母と聖エリサベタの邂逅の圖の一部

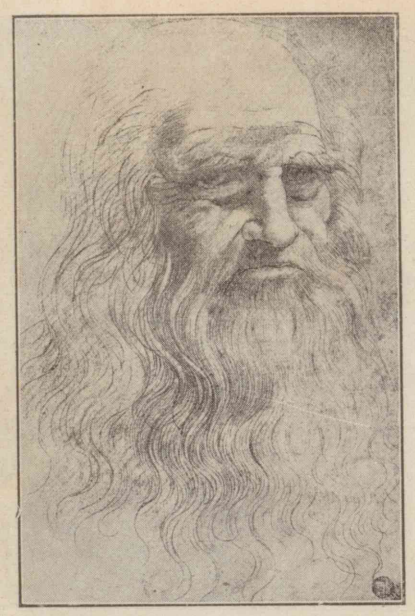
この二人は仲が善くありませんでした。レオナルドの方が二十ばかり歳上でしたが、アンジェロは名高い家に生れ、レオナルドは農婦の兒でした。二人とも少年の頃から繪がうまく、アンジェロは又同時に優れた大彫刻家で、大建築家で、大詩人、レオナルドは又美術家であるのみならず、第一流の思想家で

モナ、リザ　レオナルド、ダ、ピンチ筆

（七　文藝復興期の畫家）

モナ、リザ

モナはマドンナの畧。筆者友人フローレンスの市民フランチェスコ、ジヨコンドの妻、この繪のモデルとなりし時は三十歳前後と推定せらる。ダ、ビンチはこの繪を畫く時、モデルに憂鬱の表情を宿らしめぬ爲、側に樂師を置きて奏樂せしめたりと言ふ。この表情よりは善良にして而も叡智的なる輝き、感覺的情熱を感ず。口邊の微笑は女性の永遠の謎を含むと稱せらる。



レオナルド、ダ、ビンチ自畫像

科學者で數學家で、彫刻もやり建築もやり、音樂もやり、何でも人よりよく出來ました。世界で始めて飛行機の事も考へました。かういふ何でも出來る人はその頃非常に尊まれて、完人と云はれて羨まれました。何しろ兩方共大變な人です。人間の總大將にもなれる人です。それが二人ならんでゐるのだから恐しい。他の美術家は小さくなつてゐました。

アンジェロはおつかない、高い險阻な山のやうな人です。

大きな大理石が山から切出されて誰もそれに手をつける人もないのに、彼は進んで「うむ、これは丁度いゝ。」といつて忽ち世界一のダビデの像をこしらへました。又或時は法王の注文でシスティンのお寺に、舊約聖書の話をかく壁畫と天井畫を頼まれましたが、アンジェロはそれ迄主に彫刻をやつてゐて餘り繪はかゝないのに、いざかくとなると飲まず食はずで働き、とう〳〵お堂のつきあたりと天井一面に、昔も今も例のない何百人といふ裸

ダビデ　Davide　(B.C.933頃.)　ミケルアンジェロ作

システィンの寺　Sistine Chapel

ミケルアンジェロ筆　システィン禮拜堂天井畫の一部分

キューピッド　Cupid　愛の神

體の人のゐる莊大な繪をかき埋めました。餘り上をむいて熱心にかいたので、久しく首が曲つてゐました。始終七つも八つも病氣を背負つてゐて、心配事が絶えずあつて、のんきに休む暇などはありません。時には自分のこしらへたキューピッドの彫刻をわざと地の中に埋めておいて、ギリシヤの古代彫刻だと云つて人を驚かします。彼はヘブライの聖人モーゼの肖像を大理石でこしらへま

したが、それは彼その人のやうに莊嚴で氣高く、思はず頭が下ります。モーゼはその手に法律を記した板をもち、全智全能の角が生えてゐます。

ヘブライ Hebrews　セム族に屬する民族。

モーゼ Moses　ヘブライ族の立法家、豫言者。

それと反對にレオナルドはじつとして靜かで、深く高く夜の空の北極星のやうです。始終何か考へてゐます。雨の降る日、街に立つて、鋪石の雨のシミを默つて見てゐます。お弟子が先生はどうしたのかと思ふと、先生は笑ひながら、そのシミの形から考へて大戰爭の有樣や、見てもぞつとする化物の恰好を繪にかきました。街で奇麗な人に逢ふと、どこまでもどこまでもついて行き、そしてその美を覺えてしまひます。モナ、リザといふ世界の寶の小さな肖像畫を

モーゼ　ミケルアンジエロ作

（七　文藝復興期の畫家）

ミケルアンジェロ

隆盛期ルネッサンスに出でたる彫刻・繪畫・建築の大家にして、殊に彫刻に秀づ。彼は剛健なる意志の人にして努力と奮鬪の精神は其の作品の面に現はる。

モーゼ

法王ユリウス二世墳墓の裝飾彫像。モーゼはイスラエルの立法家且豫言者。彫像の角は智を現し、右手に抱ける板にはモーゼの十戒を記せり。筋肉の隆起を見ればあらゆるものを壓倒せざれば已まざる威力を感ぜらる。

モナ、リザ Mona Lisa

フィレンツェの名家、ツアーピ、デル、ジョコンド夫人をモデルとせる畫像。

かく時には、三年もかゝつてまだ出來ません。さうかと思ふと、ルネッサンスにも類のない「最後の晩餐」といふ壁畫の時には、朝から晩までかいてゐて、ちつともくたびれた樣子がありません。さうして繪をかゝない他の時には、新式の大砲を考へたり、運河を工夫したり、彈丸が當つても壞れない船を考へたり、飛行機の羽をこしらへます。今いつた大きな壁畫は、キリストが自分の始めてのお弟子の中に裏切者がゐるのを暗に皆にいひきかす所をかいた繪で、お弟子は食卓にならんで、意外の事をきゝ、すつかり驚いてざわざわしてゐます。それが實によくかけてゐます。その後いたんでしまひましたが、彼の代表的傑作です。或繪の批

評家は、一枚の畫だが一日かゝつてみる芝居よりいゝと云つて賞めました。

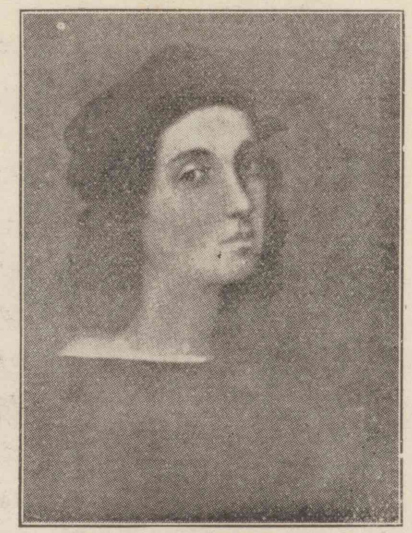
處がこゝに或禮儀知らずの人があてアンジェロとレオナルドとを競爭させようと考へました。二人に同時に仕事をいひつけたのです。で、二人は世にも眞劍になつて、アンジェロは兵士の水浴を、レオナルドは軍旗の戰を、雙方實に立派にかき上げました。併しこの二つはあと

レオナルド、ダ、ビンチ筆最後の晩餐

ラファエル自畫像

で無くなつてしまひました。

晩年、レオナルドが身よりもなく、寂しく街を歩いてゐますと、向ふから奇麗な青年が馬にのつてお供を澤山つれてやつて來ます。よくみるとそのお供の中には昔レオナルドの弟子だつたが、いつか逃出してみえなくなつたへつぽこ畫かきも交つてゐます。すると馬上の青年は馬を下りて、レオナルドに丁寧にお辭儀をしました。それはラファエルといふ、その頃世間にもてはやされた、若い利口



な畫かきでした。彼は僅か三十七で死にましたが澤山に畫を殘して、後の世の人は大變尊敬します。併し實はちつとも缺點のない繪をかいた、賢いことは賢い人ですが、餘り圓滿すぎて、强味は他の人に及びません。アンジェロは彼を呼んで「あれは後の世で一番幸福な人間だ。」といひました。春の日に青空を歌ふ、平和なひばりのやうに、と云ふ意味です。彼の畫をみると世の

ラファエル筆肖像

ラファエル筆マドンナ

ニール河の草　大正八年十二月、洛陽堂發行。

佐藤春夫　和歌山縣新宮町の人、明治廿五年生る。小說家、詩人。

八　感傷肖像

摘めといふから

中は樂しく感ぜられます。しかしアンジェロの繪をみると、人間が莊嚴に見えます。レオナルドの繪をみれば、世界は實に深い、貴い氣がします。何れも美術の恩澤であります。

（「少年藝術史ニール河の艸」による）

佐藤春夫

ばらをつんでわたしたら、
無心でそれをめちやくちに
もぎくだいてゐる。
それで、おこつたら
おどろいた目を見ひらいて、
そのこなごなの花びらを
そつと私の手にのせた。
その目は涙ぐんで笑ひ
その口は笑つて頬は泣いてゐる。
このモナリザはまるで小娘だ。

（佐藤春夫詩集）

佐藤春夫詩集
六二頁―六三頁。大正十三年五月、第一書房發行。

九　先生への通信

吉村冬彦

一、ヴェニスから

お寺の鳩に豆をかつてやるのは、日本にかぎらず、世界どこでもおなじことをやつてゐます。但し豆ではなくて玉蜀黍を細長い円錐形の紙袋につめたのを賣つてゐます。大道で鍋を煮立たせて、茹章魚をうつてゐる男がゐました。

ヴェニスの町はくちたれてゐるが、それはうつくしくくちたれてゐるので、壁のはがれたのも、乃至は

吉村冬彦
本名は寺田寅彦。理學博士。東京帝國大學教授。

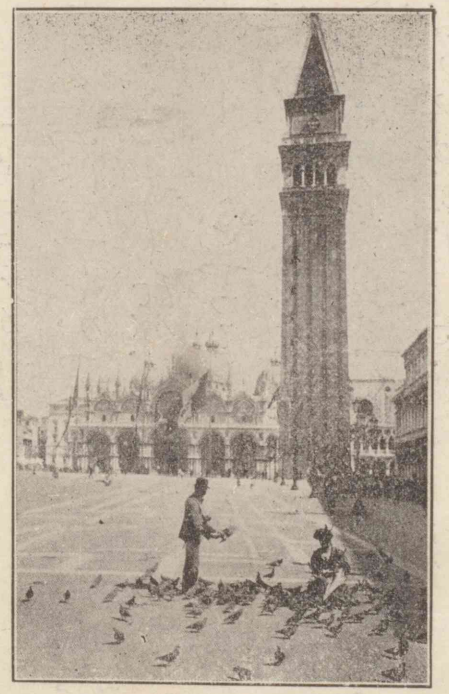
サン・マルコ　San Marcos

ベニス　Venice　イタリア東北部の貿易港。「水の都」の名あり。

サン、マルコ寺

ゴンドラ Gondola 畫舫。ベニスの川を往來する小さき平舟

窓からぶら下げた洗濯物迄も、悉くふに云はれぬつく〳〵くくすんだ好い色彩を示してゐます。霜枯れ時だのに美しい常緑木の緑と、青玉のやうなすしの色とが古びた家の黄や赤や茶によくうつります。



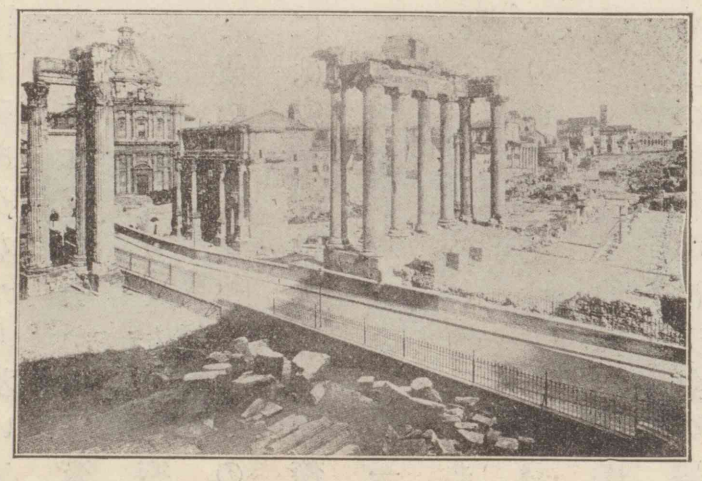
ゴンドラも面白く、貪るい女もうつくしく見えます。

アルバノ湖 Albano

ローマの廢墟

ロッカディパパ Roccadipapa

オリーブ Olive 橄欖



二　羅馬から

羅馬へ來て累々たる廢墟の間を彷徨してゐます。今日は市街を離れてアルバノの湖から、ロッカディパパの方へ古い火山の跡を見に參りました。到る處の山腹にはオリーブの實が熟して、その下には羊の群が遊んでゐます。山路で、大原女のやうに頭の上へ枯枝と蝙蝠傘を一緒に束ねたのを載せ

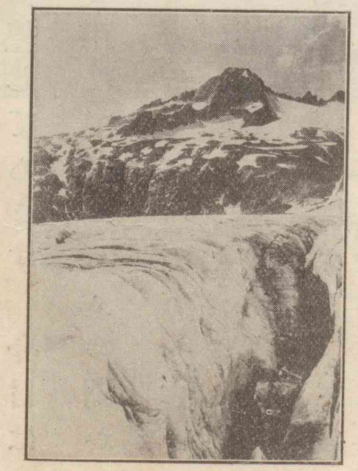
て、靴下をあみながら歩いて來る女に會ひました。角の長い牛に材木車を引かせて來るのもあれば、驢馬に炭を積んで來るのもありました。蜜柑の木もあれば竹もあります。眼と髪の黒い女が水溜りのまはりに集つて洗濯してゐる傍には鷄が群遊び、豚が路傍でないてゐます。バチカンも一部見ましたが、こゝの名物はうまい物ばかりのやうです。

バチカン　羅馬の一丘陵、羅馬法王宮殿のあるところ。
Vatican

氷河

三　伯林から

今度の旅行中は天氣の惡い日が多くて、殊に瑞西では雨や霧のためにアルプスの雪も見えず、割合につまりません

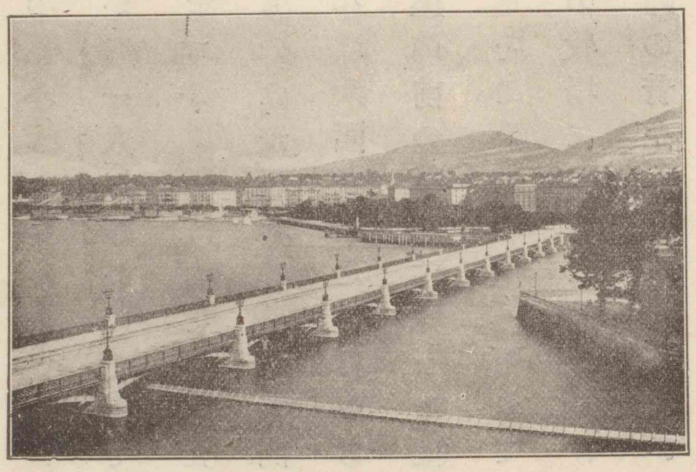


モンブラン　スイスの美山。アルプスの高峰。
Mont Blanc

モンブラン橋

ガイド　案内者。
Guide

でした。それでもモンブランの氷河を見に行つた日は天氣が好くて面白う御座いました。寒暖計を一本下げて氣温を測つたりして歩きました。鶴嘴のやうな杖をさげて繩を肩に擔いだ案内者が、英語でガイドはいらぬかと云ふから、お前は英語を話すかと訊くと、いゝえと云ひました。辷らない用心に靴の上へ靴下を穿いて、一人で氷河を渡りました。



好い心持でした。氷河の向側は嶮路で、高山植物が山の間

タバーン Tavern 居酒屋。茶屋。

シャモニ Chamonix フランス東南部モンブラン山麓の村。

に花を綴り、處々に瀧があります。こゝから谷へ下りる途中に、小さなタバーンといつたやうな家の前を通つたら、後から一人追つかけて來て、お前は日本人ではないかと訊きますから、さうだと答へたら、私は英人でウェストンといふものだが、日本には八年間もゐてあらゆる高山へ登り、富士へは六回登つたことがあると話しました。その細君は宿屋の前の草原で靴下を編んでゐました。

そこから谷底へ下りてシャモニまで歩きましたが、道端の牧場には首に鈴をつけた牛が放し飼にしてあつて、その鈴の音が非常に心地よい音をつたへます。又番人の子供や婆さんもほんたうに繪のやうで愉快でした。日本にも

洗濯（ドイツ風俗）

キネマ Cinema 活動寫眞

あるやうな秋草が咲いてゐたり、踏切番の小屋に菊が咲いてゐたり、路傍のマリヤの御堂に花が供へてあるのも見ました。いよ〳〵シャモニへはいる頃には、もう日が暮れかゝつて、眞紅な夕陽がブゾンの氷河の頂を染めた時は實に綺麗でした。

村の町には名物の瑪瑙細工やら牛の角細工を並べた店ばかり連なつて、かういふ處にはお極りのキネマが自働ピアノで客を呼んでゐました。巴里あたりから來てゐるらしいはでな服裝をした女が散歩してゐま

した。

シャモニからゼネバへ歸つて、郊外に老學者サラサン氏を訪ねました。大變喜んで迎へてくれ、自分の馬車にのせて町中を案内してくれました。晝飯をよばれてから後にその廣い所有地を見て歩きました。この人の細君が私どもの論文を佛譯して、こゝの學術雜誌に載せてくれたのださうです。こゝはもう佛蘭西の國境近くで、邸のベランダから牧場越しに國境の森が見え、又ボルテーアの住つてゐたといふ家も見えます。毛氈のやうな草原に二百年もたつた柏の樹や、百年餘の栗の木がぽつぽつ竝んで、その間をうねつた徑が通つてゐます。地所の片隅に地中から空氣

ゼネバ　Geneva　スイスの西南隅の都會。

ベランダ　Verandah　日本家屋の緣側にあたるものにして少し廣し。

ボルテーア　Voltaire　フランスの詩人且劇作家。（西暦一六九四年―一七七八年。）

を吹出したり吸込んだりする井戸があつて、そこでその理窟を說明して聞かせました。低氣壓が來る時には噴出が盛になつて、麥藁帽ぐらゐ噴上げるなどと話しました。それから小作人の住宅や、牛小舍・豚小舍などまで見て歩きました。小作人等に一々アローと聲をかけて、一言二言話してゐました。農家の建て方など古い昔のまゝださうです。

邸の入口から玄關までは橡の並木がつづいてゐます。その兩脇は林檎畑で、ちやうど林檎が赤く熟してゐました。書齋には羅馬で買つて來たといふ大理石の半身像が幾つもある。サラサン氏は一々その頭を撫でその顏をさすつて見せるのでした。この日は霧があつて、小雨そぼふる誠

アロー　Halloo　人の注意を引くために呼びかくる語。「もしもし」又は「やあ」に相當す。

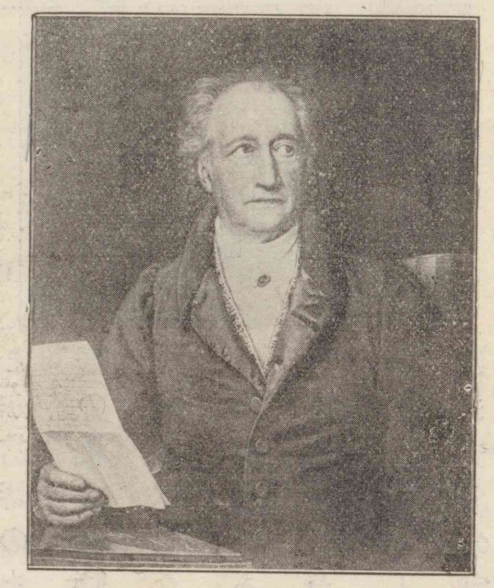
ベルン　Bern　スイスの首府。
チューリヒ　Zurich　スイスの工業市。
ルツェルン　Luzern　スイス中部の都會。
ドレスデン國立劇場
ストラスブルヒ　Strasburg　フランス東北部の都會。
ニュルンベルヒ　Nürnberg　ドイツ南部の工業市。

に靜かな日でした。

ゼネバからベルン・チューリヒ・ルツェルンなどを見て廻りました。ルツェルンには戰爭と平和の博物館といふのがあつて、日露戰爭の部には俗惡な錦繪が澤山陳列してあつたので少しいやになりました。到る處の谷や斜面には牧場がつらなり、林檎が實つて美しい國だと思ひました。

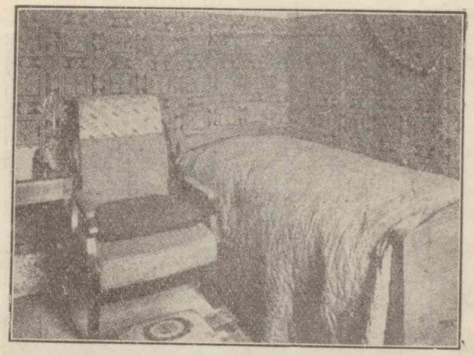
それからストラスブルヒを見て、ニュルンベルヒへ參り

ミュンヘン　München　ドイツバワリヤの都會。
ドレスデン　Dresden　ドイツ、サクソニアの都會。
ワイマール　Weimar　ドイツ中部の都會。
ゲーテ　Goethe　ドイツの詩人、戲曲家。（西暦一七四九年—一八三九年）
シラー　Schiller　ゲーテと竝び稱せらるる詩人。（西暦一七五九年—一八〇五年）



ました。中世の獨逸を見るやうな氣がして面白う御座いました。ミュンヘンでは四日泊り、それからドレスデンやらエナへ行つて後、ワイマールに二時間ばかり止つて、ゲーテとシラーの家を見ました。ゲーテが死ぬ前に庭の土を取寄せて皿へ入れて分析しようとしてゐたら、急に惡くなつたのださうで、書齋の窓の下の高い書架の上に土を入れた皿が今でも置いてあります。隣の寢室へ擔ぎ込んだが、寢臺

の上へ横になる事が出來なくて肱掛椅子に凭れたまゝだつたさうです。椅子の横の臺の上には藥瓶と急須と茶碗とが當時のまゝに置いてあります。書齋の机でも寢室でも意外に質素なもので驚きました。二階の室々には色々遺物等並べてありますが、私にはゲーテの實驗に使つた物理器械や標本等が面白う御座いました。



ゲーテ終焉の室

シラーの家は一層質素といふよりは寧ろ貧しいぐらゐでした。ゲーテの家には制服をつけた立派な番人が數人ゐましたが、シラーの方には猫背の女が唯一人番してゐました。裏庭の向側の窓はもう他所の家で、職人が何か細工をしてゐたやうです。シラー町の突當りの角は大きな當世風のカフェーで、硝子窓の中から二十世紀の男女が、通りかゝつた毛色の變つた私を珍しさうに見物してゐました。町も辻も落葉が散敷いて、古い煉瓦の壁には血の色をした蔓が絡み、溫かい日光は宮城の番兵の兜に光つて居りました。

カフェー　Café　喫茶店。

シラー

ゲッチンゲン　Göttingen　プロシヤのハンノフェル州に在る都會。

私はもう十日ばかりで伯林を引上げ、ゲッチンゲンへ參

現代式
アタラシイ

藪柑子集　二四二頁―二五三頁。大正十二年二月、岩波書店發行。

湯淺常山　名は元禎、岡山藩の儒者。天明元年（一七八一）歿、年七十四。

曾呂利新左衞門　和泉の人。堺に於ける刀鞘職。和歌に巧にして頓才に富み秀吉に愛せらる。慶長八年（一六〇三）歿。

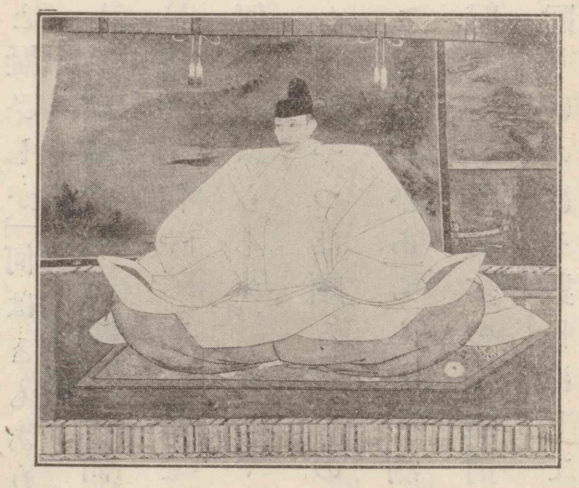
（藪柑子集）

一〇　曾呂利新左衞門

湯淺常山

堺の鞘師、初めて太閤に謁しける時、太閤「汝の姓名は何と申すぞ。」と問ひけるに、そのものの對ふるやう、「臣が姓名はすなはち曾呂利新左衞門と申し候。」太閤「はゝあ奇な姓もあるものなるかな。してその曾呂利と申す姓には、何ぞいはれにてもありつるものなるか。」と問はせけるに、又答ふるやう、「聊かいはれこれあり候。別儀にあらず、臣の拵へたる鞘は堅くして曾呂利と入り、敢てつかへず、こゝを以て曾呂利と申し候。」太閤「こは奇なり。又折節來るべし。」といはる。

豐太閤像



他日また太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、「汝の姓名は何とか申せしな。」答へて曰く、「曾呂利曾呂利新左衞門新左衞門。」太閤怪しみてその重言を尋ねけるに、新左衞門の答ふるやう、「殿下、先に臣の姓名を問ひ、今また重ねて問ひ給ふ。故に臣も亦殿下重問の意に從ひ、同じく重言を以て答へ候なり。」と。新左衞門或時太閤に對ひ、「願はくは一日御耳の匂を嗅がせられたし。」と

一〇　曾呂利新左衞門

ありければ、太閤訝しく思ひ「こやつまた何をかなすらん。」と疑ひしが「何はともあれ、宜し、汝がよきに嗅げ。」と許されしかば、諸大名の御機嫌伺に出づる時を窺ひ、太閤の耳元に口寄せて何やら言ふ體なれば、皆々心中密かに驚き「かやつ何をいふらんか。若しや我を讒言するものにはあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛する所なれば、かやつがいふこと御用ひあらんも亦測られず。」と憂へ、おの〳〵自邸に歸りて、早々數多の金銀財寶を調へて、密かに曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山の如く集ひければ、太閤の御前に出で、謝していへるやう「殿下一日の御耳を拜借し、その香ばしき匂を嗅ぎたる功能によりて、金銀財寶山嶺

の如く集ひ來りて、殆ど坐するの餘席これなく候。これ全く殿下の御耳の功能なり。」とありければ、太閤も亦呆然として愕き給ひけりとなん。

又或日の事なりしが、新左衛門、太閤の機嫌を取り、頗るその功ありける程に、太閤「何なりと汝の望めるものを賜はせん。」とありけるに、新左衛門のいへるやう「臣敢て大なる望もこれなく、唯紙袋ふたつほど米を賜はりたし。」太閤「そはいと〳〵易き事なり、餘り慾少なの至りならずや。」と仰せありけるに、新左衛門「これにて澤山なり。」と申して退出なせしが、やがて二箇の紙袋を張拔き、數十百人を雇ひ來りて太閤の御前に出で「前日御約定の米これに賜はりたし。」と、

米倉二戸前を蓋うたりけるにぞ、さすがの太閤もこれには呆れて暫しことばもなかりけり。

又或日の事なりしが、かつて太閤數多金銀の蟹を鑄造らせ、之を庭の泉水或はそのほとりに放ちてたのしみとなしけるが、程經て見飽きたりとて、近習の者に何ぞ一用をいひ出づる者にこれを與へんと申されけるにぞ、皆々大いに悅び、臣はこれを紙押になさんといひ、或は臣は金の茶釜の蓋もなければ、せめてはこれを以てその蓋のつまみになさんといひ、或は何といひ彼といひて、各一箇づつ賜はりしうち、新左衞門の乞ふやう、「臣は人の相撲も既に見飽きし事なれば、この蟹を集へて、相撲を致させんと存ずるなり。」といひ

常山紀談　二十五卷。戰國より德川初世までの名將傑士の言行を錄す。第九卷「曾呂利新左衞門屢頓智の事。」

相馬御風　名は昌治、明治十六年新潟縣西頸城郡糸魚川町に生る、早稻田大學文學科出身。歌人。詩人。評論家。良寛和尚の研究家。

ければ、太閤「相撲とありては五箇や十箇にてはその興薄かるべし。悉く持行くべし。」と殘れる蟹を皆新左衞門に與へけるとなん。その頓才、實に驚くべく、感ずべし。（常山紀談）

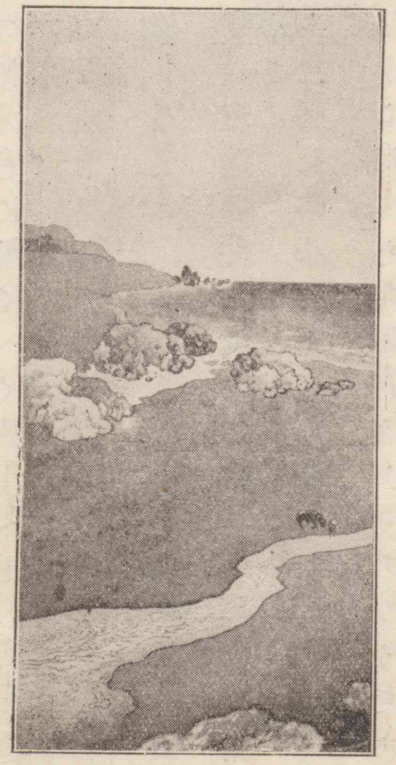
二　磯邊の小石

相馬御風

私達の住んでゐる町の海岸は、一帶に美しい小石原になつてゐる。遠くから見ると白い石ばかりのやうであるがその場所に行つて見るとさまざまな色と形とを持つた小石が混つてゐるのである。私は時々この波際の小石原を歩いたり、そ

こに坐つて海に眺め入つたり、又は、そこに寝ころんで、空を眺めたりして、かなり長い時間を過すのを私の最も好ましい慰安の一つとしてゐる。

私は又時々そこでさまざまの美しい石を探し歩くことがある。或時は赤い色の石ばかりを集めてみたり、或時は白い色の石ばかりを集めてみたり、時には又色の如何によらず丸い形の石ばかりを探して見たりす



る。しかも多くの場合私はそれらの石を家に持ちかへる事はない。ただ探して見るだけである。ただ集めてみるだけである。時には集めることすらもしないで、一つ拾つては一つ捨て、二つ拾つては二つ捨てるといふ風にしてゐる時もある。

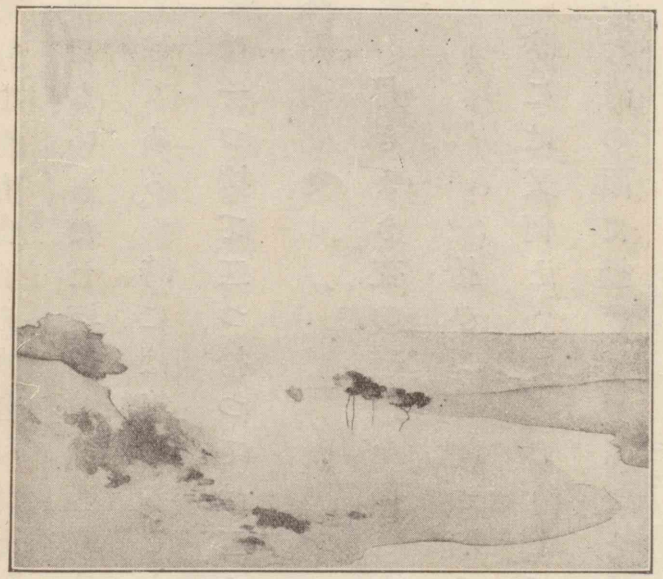
月きよき夜の磯邊をゆきかへり
拾ひては捨つ石のいくつを

時には又何といふことなしに、拾つた石をつぎつぎに靜かな海の面に投げて見ることもある。

あづさ弓春の磯邊に今日もかも　又今見ニモ
をさな兒とわれと石なげてあそぶ

磯邊　竹内栖鳳筆

をさな兒の投げたる石もわが投げし
石もおなじく海に落ちたり



時には又私はじつと一ところに坐つて手近にある石を一つ攫んでは、それを更に一つ〳〵眺め樂しむ事もある。一つ〳〵に石は、形に於ても色に於ても大きさに於ても異なつてゐる。二つと同じ石はない。珍しい色や形の石

をと探し廻る時には、なか〳〵さう特色の著しい石はないものだと云ふやうな氣がするけれども、じつと坐つて數多の石を一つ〳〵に見る時には、一つとして特色のない石はないものだと云ふ風に一つ〳〵に心を惹かれるものである。そしてそのうちのどれを特に家へ持歸らうかなどと云ふ氣は起らないものである。

拾つて樂しみ、探して樂しみ、捨てて樂しみ、投げて樂しみ、眺めて樂しみ、そして最後にはすべてそこに置去りにして來て聊かの執着も殘らない。かうした貴い樂しむ心を私に與へてくれることに對して、私はあの無言の石ころたちに深い感謝を捧げずにはゐられないのである。

愚庵和尚　俗名天田五郎。維新以來數度戰爭に從ひ三十四歳の時京都修學院の林岳寺にて得度し清水に僧庵を結び愚庵と稱す。明治三十六年寂、年五十一。

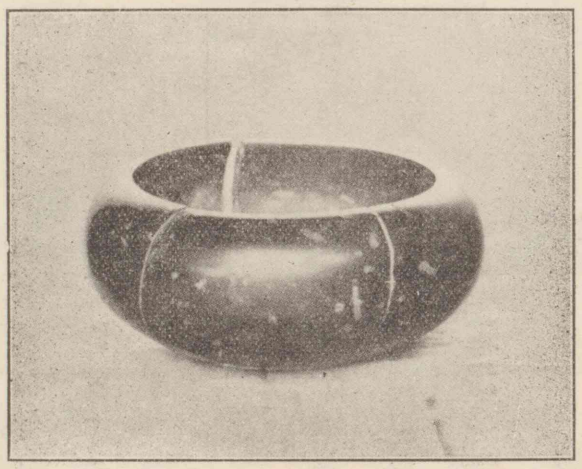
石はいつも同じ形をしてゐる。いつも同じ色をしてゐる。しかもそれに對する私の心の變化につれて、又はそれを照らす光の變化につれて、その風情を千變萬化するやうに感じられる。

石は笑ひもする。石は泣いてゐることもある。石は躍つてゐる時もある。石は怒りもする。考へもする。嘲りもする。

愚庵和尚は晩年丸い玉を愛し、丸いものを撫でてゐると心が和らいでよいと云つてゐたと云ふことである。良寛

良寛和尚　越後長岡の人、十八歳の時出家す。奇行多く、特に小兒と遊ぶ事を好む。歌・詩をよくす。天保二年(一八三一)寂、年七十四。

良寛遺愛の鉢の子



和尚は晩年手毬を最も愛してゐたと傳へられてゐる。私も時々さうしたことに倣つて丸い石を拾つてそれを心ゆくまで撫でて見ることがある。なるほど丸いものを撫でてゐると不思議に心が和らぐやうな氣がする。

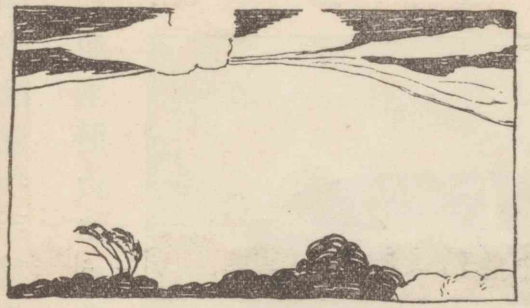
併し、石に自分の肉體の溫かみが移つた感じは好ましくない。石はやはり冷たい方が感じがよい。

海岸に坐つて小石を拾つたり捨てたりしてゐても、かな

り永い時間を樂しく過すことの出來る事は感謝すべき事である。しかもそんな事をして過した時間は、實際よりもずゐぶんと永く感じられるものである。（野を歩む者）

野を歩む者　六頁―九頁。大正十四年十二月、厚生閣發行。

千家元麿　明治二十一年、東京麹町に生る。詩人。



一二　青空　千家元麿

青空は美しい線を描いてゐる
ごたごたと重なつた家や樹木の彼方に
遠淺の海の樣に
だんだん淺いところから
無限に深くなる
朧な綠が浸出す樣だ。

野天の光り　二三七頁。大正十年四月、新潮社發行。

色は近いほど薄く
遠くは深く漫々と綠をたゝへてゐる
おゝ私の眼を喜ばす
空の不思議な直線よ
神の樣の手によつて作られた狂はない巨大の線よ
巨大な鏡よ
あらゆるものを映して歪にしない
明淨な鏡！
光の眼球よ、
おゝ神の御姿のやうな
澄切つた朗らかな空よ！（野天の光り）

一三　兄弟の對話

野上彌生子

野上彌生子　明治十九年豐後に生る。野上豐一郎夫人。小說家。

兄弟畫家

茶の間の大きなテーブルの上に、手帳やら色鉛筆やらを取散らして、二人で競爭で畫を描いてゐた兄弟の間に次のやうな對話が始つてゐます。

「人間つて何でも殺して食べてしまふのね。」

かう云つたのは兄です。

「さうね牛肉だつてお肴だつてみんな生きてたものね。」

これは弟です。

「さうさ。野菜だつて生きてるものよ。植物にも生命があるんだから。」

「わかめなら？」

その朝のおつけの實はわかめだつたのです。

「わかめだつて生命がありますよ。海の植物なんだもの。」

「家を建てる樹木にも生命があります。着物を拵へる材料もみんな生命あるものから取らなければなりません。さうすると他のものの生命を損ふ事なしに生活するにはどうしたらよいか、といふ思考が當然の順序として二人の頭の中に起つて來たのでありました。

「空氣は生命がないよ。」

兄は今度は生命のないものを數へ始めました。弟もすぐ後から續けました。

「土だつて生命がないのね。」

「岩もないよ。」

「水もないよ。」

「ぢや、土へ穴を掘つて、そこをお家にするといゝんだな。そして水ばかし飲んでればいゝんだ。でも雨が降ると困るなあ。」

「僕いゝことがある。」

邦夫は彼の計畫をさも獨創を誇るもののやうに語りま

新しき命
「母親の通信」二四八頁―二五〇頁。大正十四年三月、岩波書店發行。

里見弴（トン）
本名山内英夫。明治二十一年横濱市に生る。學習院高等科を經て東京帝國大學英文科に學ぶ。小説家。

した。それは穴をすべて横穴にすると云ふ提案でありました。二人はこれで滿足しました。さうしてやがてその對話を終つた時分には、彼等のノートブックの面は、奇妙な穴居生活の住民のさまざまなスケッチで一杯に充たされてゐました。

（新らしき命）

一四　伊豫すだれ

里見弴

「先刻（さつき）から、なんだかたべてみたいものがあるのだけど、……節ちやん、あなた考へてよ、どうしてもわからないのだから、ね。」

淋しいからといつて、こちらから頼んで同居して貰つて

里見弴

ゐる姪の節子には、女中相手では利けない口でも利けた。

「なんでせうね。」

「氣のない返事ね。もつと親身になつて考へて頂戴よ……なんか……かう、冷たいもんで……。」

「一體、御飯のおかず？間のもの？」

「それがわかつてるくらゐなら……。」

「あら、それもわからないの、ぢあとてもわかりつこないわ。」

「わかるわよ！それがたつた今たべたいの。……なにかしら、水氣があつて、甘くつて……。」

「果實？」

「果實……でもないのだけど……。」

「冷たくつて、水氣があつて……アイスクリームは姉さんお嫌ひだつたわね。」

「あんな牛乳臭くないもんで……野菜で拵へたやうな…。」

「あゝわかつた！冷奴！」

「冷奴なんぞ御飯のおかずぢあないの。今すぐたべたいのよ。それに第一、甘いお豆腐つてのがあつて？」

「あゝ、さうね。ぢあ矢張お菓子なんでせうね？」

「一々さう訊かないでさ。訊かれてはき〳〵返事が出來るくらゐなら、とくに自分で考へついてるわ。なんでもいいから、もつとどんどん食べ物の名前を並べて御覽なさいなね。」

「さうね、困つたわね。」

「もういゝわ。こんなことくらゐで困るんなら、もう賴まないわ。」

「姉さん、もうそろ〳〵お晝寢の時間よ。それでおむづかるんだわ。」

「生意氣ね!!ひとを赤ちゃん扱ひにして……。」

「でも、姉さんみたいによく眠る人つて、私はじめてだわ。

朝十時頃まで寢てゐて、御飯をたべたかと思ふと、すぐまたお晝寢ですもの。あれで、よく夜ねられるもんだわね。」

「大きにお世話よ！あなたみたいに枕に頭をつけるが早いか、大きな口をあけてぐうぐう鼾をかき始めるやうな、そんな野蠻人ぢやあありませんからね。……あゝ、さうだわ。今夜からあなた階下で寢て頂戴！そばで、あんまりあなたがよく眠るから、それできつと私が眠られなくなつてしまふんだわ。私の分まで

勝手にあなたがねてしまふんですもの。　さうよ、あなたの眠り方と來たら、慥に二人前はたつぷりあつてよ。」

「あら、大へんねえ、二人前の眠り方つてのがあるかしら。」

「あるわ！　あなたが死んだら、灰にして錠劑に硬めて賣つてあげるわ。　セッチャリンとかなんとか名前をつけて……。」

「始まつた……。」

「始まつたつて、さうぢあないの、あなたなんて生の催眠劑が着物を着て、活動へばかり行きたがつてるやうな人よ。」

「いゝわ、なんでもいゝから、姉さん、さつさとねてお了ひなさいな。」

アダリン　睡眠藥。

「あなたの生身をさ、小刀かなんかで削つて少しづつ煎じて飲んだら、さぞよく利くでせうよ。」

「いやよ！　ひとを、朝鮮人參かなんぞみたいに……。」

「ちよつとそばにゐられただけで、いくらかもう利いて來たやうな氣がするわね。　枕を持つていらつしやい、ねてあげるから。」

「恩にきせてまで、ねて貰はなくつてもいゝわ。」

「一度で、はいとおつしやい！　何よセッチャリンのくせに！　枕を出したら、すつかり簾をおろして……あゝ、それからね、セッチャリンで思ひ出したけれど、今度おもてへ出たら、忘れずにまたアダリンを買つてきといて頂戴ね。」

「あらもう飲んでおしまひになつたの？毒だわ、姉さん、そんなに矢鱈に飲んぢゃ駄目よ！」

「まあいやだ！商賣敵だと思つて、やきもちをやいてるのよ。」

「商賣敵……？」

「だつてさうでせう？　あなたのことにしてみたら、そこはなんと云つても、人情、セッチャリンの方が餘計に賣りたいでせうからね。」

「知らないわ、もう。」

二十になる姪の娘が、中型の萩に水のゆかたの袂で、すました顔へ風を送るのを、尻目だけで笑ひ見やりながら、

「わかつたわ。……ねえ、節ちゃん、思ひ出せてよ！」

それでも默つてそつぽを向いてゐた。

「生意氣ね、慍つたふりなんぞして……。先刻のたべたいものがわかつたのよ。ね、なんだと思つて？」

「知らないわ。」

「そんなこと云ふと、敎へてあげないことよ。」

「いらないわ。」

「あのね、いゝ子だから、枕と搔卷を持つていらつしやい。さうしたら敎へてあげるわ。ね！」

「澤山よ。」

「それぢあ、梅やに買つて來て貰つたつて、あなたにはたべ

させないから……。」

「一體なんなの？何がそんなにたべたかつたの？」

「水羊羹。」

「なあに？水羊羹？」

「さうよ。」

「なんだ、つまらない！」

「あなたにはつまらなくつたつて、私はたべたいのよ！あ、たべたい、たべたい、たべたい！すぐに買はせにやつて頂戴よ、ね、早く！」

「水羊羹つてただの水羊羹？」

「さうよ、種も仕掛もいらないの。ただの水羊羹でいゝんだから、早く買つて來てつてよ！」

「へんねえ。」

立つて押入から座蒲團を二枚出して敷並べ「さ、買つて來て貰ふ間、ねんこして待つていらつしやい。」

「感心々々。」

輕さうな髷なしの束髪を劬りなく枕につけて、節子のかけてくれる麻の小搔卷に、お腹から下をくるりと包むやうにした。

「簾、あんまりおろすと、風が通さないでせう。」

「いゝのよ。ぢかに青空が見えては、とてもねられやしないわ。」

それで、すつかり簾を垂れて了つてから、姪は階下へおりて行つた。

「大急ぎよ。」

うしろから呼びかけて置いて、靜かに目をつぶつた。——

齒にしみるほど冷切つた水羊羹の、手答のない重みや、細かなざらざらが、あり〳〵ともう舌の上に思ひ描かれて來た。

耳の下の輕い痛みと一緒に、口中いつぱいに唾がたまり、つんと鼻へぬけて、なんとなく焦くさいやうな甘みがしきりと戀はれた。ごくりと咽を通す唾の味なさに腹がたつた。

八疊の居間の、地袋の上が、冬は大抵閉てきりの圓窓になつてゐた。そつちへ、微かながら空氣が動き流れて行つた。

眞夏午後二時の空は、晴輝いて、伊豫簾の細い目にも、瑠璃を溶いてなすりつけたほど濃かつた。部屋のなかの黑白(あいろ)には、澄明な海水を通して射し入る陽の薄暗さがまとひ、床の隅々などがしつとりした。どこかの普請場で、金槌の音がしてゐた。……女の氣持が、ゆつたりと落ちついて來た。びりびり動いてゐた睫毛も、じつと組合はされ、あけようとすると、微かな痛みと涙とが、眼瞼(まぶた)の裏に感じられた。

ことり、ことり——北の圓窓で、懶(ものう)げに簾が鳴つてゐた。

……ほどなく寐入つた。

緣談簾
「伊豫簾」一三五頁—一四五頁。大正十四年十二月、改造社發行。

吉田絃二郎
本名は源次郎、明治十九年佐賀縣に生る。早稲田大學英文科出身。小說家。

吉田絃二郎

コバルト Cobalt 紺碧色。

ルビー Ruby 深紅色及び淡紅色の寶石。

一五　無數の寶石

吉田絃二郎

雨が晴れた後や、朝まだ露が草の葉に置いてゐる時は、日光の照具合で、色々な色彩が一つ〳〵の露から生まれて來る。

その一つ〳〵の露が作り出す色彩の美しさは、どのやうな寶石の輝きも及ばないほどのものである。

紫・紅・コバルト・ルビー……それが一つ〳〵星のやうにまたゝいてゐる。

無數の寶石、無限の色彩、それが庭一面に、原一面に投げられてある。何物をも持たぬ私は、すべての寶石と、色彩を惠まれてゐる。

若い女たちよ、お前のただ一つの紅寶石の指環をお捨て。そして素足のまゝ朝の露を踏んで御覽。

あんなにたくさんの寶石が、お前の足の裏にころがつてゐる。

刹那だけだつて？

さうではない。明日も、明後日も太陽と大地があるかぎりは、露があるかぎりは無數の寶石が輝く。

あれはみんなお前のものだ。

あれはみんな乞食のものだ。
あれはまたみんな王樣のものだ。
そのうち一等貧しい人が、一等多く、あの寶石の美しさを知ることが出來る。
星を御覽。月を、太陽を、……微風を……あれもみんな私たちのものなんだ。

（雜草の中）

雜草の中
「小鳥の巢」三七頁―三八頁。大正十一年七月、聚英閣發行。

島崎藤村
名は春樹、長野縣の人、明治五年生、小說家。詩人。

一六　熱帶の海

島崎藤村

船は印度の南端を過ぎた。時とすると驟雨が印度洋へ來た。それが我々の甲板へ吹込んだ。合奏のやうな海の音も聞えた。雨後は殊に蒸暑い。白い熱を帶びた雲が行

手の空に起つて、其處にあるものは永遠の眞夏かと疑はせた。

ふと波の間に一艘の汽船が見えた。我々の甲板からその汽船を認めた者は、何れも欄の處に立つて眺めた。「あ、日本の船ではないか。」と、私は自分で自分に言つて見た。

その二本の檣、その一本の煙筒、我々の乘船に比べると、自ら構造を異にしたその黑い船の形皆覺えがあつた。

私は艫の方の太い綱の積んである甲板の上に走つて行

マルセーユ Marseilles　佛國の地中海岸の港。

エルネスト、シモン Ernest Simon　佛國郵船の名、作者のこの時乘船し居れるもの。

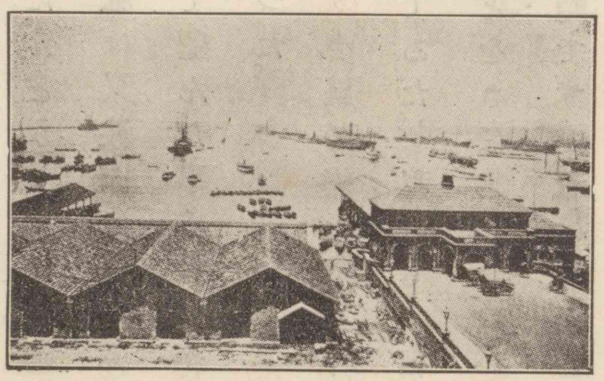
つた。其處から船を望まうとした。神戸出發以來、我々の船と前後して、マルセーユへ向ふ郵船會社の汽船があつたから、波間に見えるのもその船らしく思はれた。貨物を積むことの割合に少くて、速力の多く出るエルネスト、シモンは見る間にその船に追附いた。遠く離れて來た自分の國を一つの船にして見せてくれるやうなその形が、恰も繪卷物のやうにして私の眼前にあつた。私は青く光る波を隔てて、向ふの甲板に集る人々の影までも望むことが出來た。果してそれが同胞であるか否かを見定めることは出來なかつたけれども、私は頻りに自分の帽子を振つて見た。

間もなく、エルネスト、シモンはその船を遠く後に殘して

シンガポール Singapore　馬來半島南端の良港。

コロンボ Colombo　セイロン島の首都。

進んで行つた。海は又沙漠のやうな空虛に還つた。鳥一羽、船一艘、何一つ眼に入る物もなかつた。我々の船がシンガポールを離れたころはまだそれほどにも思はなかつたが、いよ〳〵印度の南端も過ぎコロンボもはや後になつた時、何となく私も心寂しさを感じて來た。故國の消息が絶えたことも既に二十二日であつた。



船はアラビヤの海へ入つて行つた。其處には油を流したやうな海があつた。どろりとした青い波は、幾趣幾樣か

の渦と皺と紋とを描いて見せた。白い雲の影が海に映るほどの晴れた日で、その靜けさは熱帶らしい靜けさであつた。どうかすると海は蛇の肌と滑らかさとをも見せた。

私は又波間に群飛ぶ銀色の飛魚をも見て行つた。未だ曾て望んだ事もないやうな夕日に燃える火の海をも見て行つた。

夕風の樂しさに、甲板では皆おもひ〳〵に涼話を持寄つてゐた。私はもう自分の皮膚の色の異なつて居ることなどをさほど感じないで、みなの涼話に耳を傾けてゐた。「失禮ですが、私はMといふ者です。コロンボからこの船に乘つて參つたものです。」と、その時私の側へ來て名刺をくれ

た日本の絹商があつた。こんな外國人ばかりのうちで、珍しい同胞に遭つて、國の言葉で話が出來ようとは全く私も思ひがけないことであつた。

明けても暮れても私が眺めて行つたものは海だ。風のある日は、濃い藍色の波の間に白波の碎けるのが涼しく見えるやうな海を。日光の烈しい日はまた波から來る青い青い反射がまぶしく眼を射るやうな海を。

日の光は亞刺比亞の海に滿ちてゐた。人を避けて私は海を見に行つた。一切を忘れさせるものは海だ。躍れ。躍れ。海よ躍れ。舷に近く白い大きな花輪を見る樣なの

はわれ〳〵の船から起す波の泡であつた。忽ちその泡が近い波の上へ擴がつて行つて、星のやうに散亂れて、やがて痕跡も無く消えて行つた。私は遠く青く光る海のかなたに、無數の魚の群かとも思はれる波の動搖をも認めた。條理もなく、筋道もない海。先蹤もなく、標柱もない海。豐富で、しかも捉へることの出來ないやうな海。何處を出發點とも何處を結末ともいひ難いやうな海。私の眼に映るものは唯日の光であつた。波の背に反射する

影であつた。藍色の波の上に浮揚つて、やがて消えて行く泡であつた。波と波と相擊つて、時々揚る水煙であつた。光と熱と波とは殆ど一つに溶合つて、私は自分の身體までその中へ吸はれて行く思をした。

大船の心安さ。私は波打際の砂の上に身を置くやうな、海から離れた心持をもつて、しかも岸から窺ふことの出來ない海の懷を、まのあたりに近く見て行つた。卷きつゝある。開きつゝある。湧きつゝある。起りつゝある。奔りつゝある。放ちつゝある。延びつゝある。狂ひつゝある。亂れつゝある。競ひつゝある。溢れつゝある。釀しつゝある。流れつゝある。止りつゝある。轉びつゝある。陷

沒りつゝある。渦巻きつゝある。波は波の中に滑り入りつゝある。搖れつゝある。震へつゝある。觸れつゝある。擊合ひつゝある。逆立ちつゝある。連なりつゝある。つづきつゝある。われとわがみを恣にしつゝある。長い廊下のやうな甲板から眺めると、すこし斜に成つた欄の線があたかも遠い水平線と擦れ〳〵にあつて、あるひは水平線の方が高くなつたり、あるひは欄の線の方が高くなつたりするやうに見えた。どうかすると、青い深い海はその板の間まで這上つて來るやうにも見えた——波の動搖に身を任せて居た私のすぐ足許まで。

（海へ）

海へ
八〇頁—九〇頁。大正七年七月、實業之日本社發行。

饗庭篁村
名は與三郎、東京の人、小說家。劇評家。大正十二年歿、年六十八。

天明
德川家治の時代の年號。

文化・文政
德川家齊の時代の年號。

蜀山人像

太田南畝
名は覃、蜀山人・四方赤良・四方山人・寢惚先生等の別號あり、最も狂歌を能くす。文政六年（一八二三）歿、年七十五。

壽經寺
淨土宗。一に傳通院と稱す。

一七　蜀山人の盆燈籠

饗庭篁村

天明より文化・文政まで、久しく文壇の牛耳をとり寢惚先生の名に世人の眠をさましたる太田南畝翁の事蹟については、面白きこと頗る多し。今左にその一つを記さん。

文化元年の頃とか、小石川陸尺町に庄助と呼ぶ男住めり。日傭又はかつぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二日の朝、小石川壽經寺の門前に立つ草市へ、行燈燈籠といふものを持行きて賣りけるに、如何にしけるにや、買

あらそわぬ
風に柳のかたこそ
かんにんぶかそう
ぬうべかりけり

神樂坂
東京市牛込區。

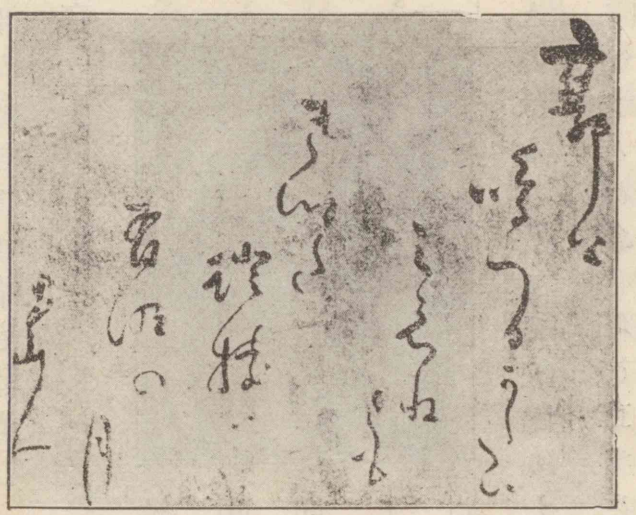
ふ者更になく、賣れしはわづか十ばかり、殘りしが多ければ力を落し、情なき顏してかつぎ歸りしが、南畝翁方へは常々出入る者ゆゑ、歸りがけに立寄りて、臺所の者に向ひ「偖々困る事かな。この盆はいかにして過し申さん。今朝の市にこれほど燈籠賣れ殘り候。この分にては、明朝神樂坂の市に持行き候とも、また今朝の如くなるべし。もとより手細工にせしことにはあれど、いさゝか資本もかゝりたり。この分にては水も呑まれ申さず。」とかこちけり。

南畝翁は座敷にて之を聞かれ、手に持つ盃を下に置きて、「かの聲は庄助にあらずや。何事を申すにや。」と問はるゝにぞ、傍の者「斯樣々々にて、又かのぐづ男が泣き申候。」と云

ひければ、翁は臺所に出でられ「偖も氣の毒なる事よ。顆の下が乾きては誰も難儀ならん。わが云ふ如くせば、少しは賣るゝ事もあるべし。」と云はれければ「それは有難き事に候。いかに致すべきか。」と、翁の顏をいかにも有難氣に仰ぎ見て問ふに、翁は白紙五帖ばかり取出し「これにてその燈籠を張替へよ。われそれに何か書きてやらん。」

といはる。悅びて立歸りしが、忽ちに百ばかり張替へて持ちきたれば、翁は例の草書にて、狂歌やら發句やらなぐりつけて渡されしに、庄助は頭を搔きつゝ一禮を述べて、荷ひ歸

りながらも、「蓮の花を紅入りにて書いてさへ賣れざるに、いかに先生なればとて、かゝる冗書の反古張にては買手はあるまじ。」さりながらあれ程に仰せられしものなれば、先づ明朝、神樂坂の市に持行き、賣れ殘りたらば、その事を申して歎きつき、二百疋も借りて外商ひの資本とせん。」と、工面顔にて足も重く、二三町あゆむ向ふより侍一人往過ぎしが、供の者に云ひつけて、「その燈籠は賣物か。」



蜀山人筆蹟
郭公鳴きつる方は見えねども聞いた證據は有明の月　蜀山人

と問はしむ。偖はと悅び、「いかにも賣物に候。やう〳〵傳を求めて先生に書いてお貰ひ申したるにて、心あても有りて拵へ候なれども、このやうには入申さず候。お望ならば、差上げ申さん。」と云ふに、「價はいか程ぞ。」と問ふ。幾許と云ひてよき事やら、庄助はたと行詰りしが、思ひ切つて、「五十文。」と云ふ。「その直にて二つくれよ。」と百文渡して買行きたり。又後より通りかゝりし人、「それ賣るならば買ひたし。」と云ふ。今度は息を一杯に吹きて、「六十四文。」と云ふ、いふがまゝに又買行きたり。後より又、「此方へも二つ。」「我にも一つ。」といふ有樣にて、己が家に歸るまでに二十許も賣りて、凡そ一貫二百文骨折らずに取り、いきり立つてかく

と女房に話せば、「誠に寢惚様は生佛様なり、有難き事なり。明日は早くより持出で給へ。私も參りて手傳ひ申さん。一人にては手が足るまじ。一つ盗まれても五十と百の損なり。」と女の智惠の慾が先なり。

翌朝夫婦はにこ〳〵、七つ起して神樂坂に行き、並ぶる間もなく、「蜀山人の書いたる燈籠とは珍し。」と立ちどまりて價を問ふ。庄助思ひ切つて「百文。」と云へば、「さもあらん。」と百文にて買行く。女房、夫の袖を引き、「百にても直切らずに大勢買つて行かるゝからは、二百文といふとも賣れ申さん。二百文と云ひ給へ。」と又智惠をつくるに、庄助額に手を加へ、「二百は餘り高かるべし。百五十文にせん。」と云ふ。

それより百五十文にて六七十賣り、つひには先見明らかなるその妻の言の如く、「二百文よりまかりませぬ。」と肩を怒らして賣り、まだ五つ半にもならぬに賣切りたり。

錢二十貫ほど、金にして三兩ばかりになりしゆゑ、夫婦こけつ轉びつ翁の宅に來り、亭主を搔きのけて女房まかり出で、「有難い。」を數千遍のべて、「いかにも先生は生神様なり。」と今度は神あしらひにしつゝ、悅びかへりきとぞ。翁が醉餘の戯、よく枯骨に膏すといふべし。

（雀躍）

雀躍　十九頁―二十二頁。明治四十二年四月、精華書院發行。

志賀直哉　明治十六年二月宮城縣白石に生る。東京帝國大學文科大學に學ぶ。小説家。

一八　山の木と大鋸

志賀直哉

蟲が恐しかつた。小鳥の嘴が恐しかつた。

志賀直哉

若芽は延びた。

今度はナイフが恐しかつた。枝を切りに來る人がじろじろとその邊を見廻しながら通つて行つた。

木は漸く太くなつた。

よく小鳥が蟲を探しに來てとまる。小鳥は愛らしくなつた。しかし鉈が恐しい。木こりが通る。あの腰の鉈でぽんぽんと二度たゝかれゝば、自分は胴切にされる。早く太くなりたい。

かう思つて居る内に、又少し太くなつた。鉈は大して恐

しくなくなつた。

併し鋸が恐しい。早く大きくなりたい。併し急ぐと危い。細い儘で延びると風に折倒される。

蟲や小鳥を恐れて居た若芽からは三十年經つた。あと百年經たねば鋸を全く恐れない自分にはなれない。

或日枝を取りに來た男が、ナイフで自分の肌にしるしを彫りつけた。消えないやうにと、出來るだけ深く彫りつけて行つた。自分は微笑した。併しこんな印が肌に殘つて居る内は安心出來ない。この彫つた人間が年寄になつて死んで、その孫が又年寄になつて死ぬ時代が來なければ安心出來ない。出來るだけ地から精分を吸はねばならぬ。

出來るだけ太陽の光を受けねばならぬ。そして出來るだけ延びて出來るだけ太くならう。

百年過ぎた。

もういけないと思ふやうな嵐に何十度か出會つた。南へ延過ぎた大きい枝を一本折られたが、幸に命にかゝはる程の傷は受けなかつた。嵐は憎らしい。自分は大きい枝を折られた時には、隨分腹を立てた。併し成長以外一分一厘自身を動かす事の出來ない自分を、其の暴力に對し出來るだけ抵抗の少い姿勢に變へて呉れるものは矢張嵐自身の力だと思ふと、惡意は無いと言ふ氣がして、今は憎めなくなつた。

伐木之圖

ともかくもう安心だ。

官林拂下の引渡に役人と願人とが來た。

木は何だらうと思つて上から見下して居た。

彼と同年輩の隣の木が、

「何しに來たんだらう。」と彼に聲をかけた。

「小さい木がびくびくして居るぢやないか。」

一八　山の木と大鋸

「早く行つてしまはないかな。」

「おい〳〵、君の根つこへ立つて僕を見上げながら、何か言つてゐるよ。」

「氣味の惡い奴だな。」

「心配はないよ。」

「おや、俺の足を何かでたゝいて居るぞ。」

「うん、鉈で皮を剝いで居るんだ。」

「仕樣のない奴だな。」

「矢立を出して何か番號をつけて居る。」

「氣味が惡いな。」

「あゝ歩き出した。」

炭燒の圖　ミレー筆

「今晩吹降でもあると消してやるんだがなあ。氣持が惡くてしやうがない。」

「なに何でもないよ。見給へ、大分向ふの方の連中も番號をつけられてるぢやないか。」

「さうだね。だが、どうして君はつけられなかつたらう。」

かう言つて隣の木は羨ましさうに彼を顧みた。

一週間經つた。一人の勞働者がその森に入つて來た。

暫くその邊を見廻していゝ場所を地ならし始めた。その邊の小さい木を鉈で伐始めた。何處からか熊笹を澤山切つて來た。そして三日程かゝつて其處に小さな小屋を建てた。又三日程すると、石と泥とで上の丸い小屋程の竈を作つた。願人がそれを見に來た。

「俺はこの木も這入るつもりだつたが、役人は此處までだと言張つたよ。」

「これかね？」と、勞働者は呑みさしの煙管の雁首で、番號をつけられずに濟んだ彼を指した。

彼はその時、何か知らず身震を感じた。

「それさ。」

「何、わかるもんかね。ついでに伐つてしまはうよ。」

「まあ、よせ〳〵。それ一本で、盗伐で訴へられるとつまらない。」と願人が言つた。

段々に大きな木が伐倒されて行つた。竈からは晝も夜も烟が立騰つた。それが立騰らなくなると、二三日してその中から眞黑になつたきれぎれな木の死骸が引出された。それは一まとめにされては、傍に積重ねられて行つた。

遂に彼の隣に立つてゐた木が伐られ出した。それは見たことのない非常に大きな鋸だつた。一間程の長さで、その兩端に柄がついて居た。腰を下した二人が足を根に踏張りながらそれをひいた。ずつずつ、ずつずつと靜かに伐

山上の大樹

進む。その休の無い靜かな進行は、その木の死を一層不可抗な物に思はせた。切口には三四本の環鐵のはまつた樫の楔が差してある。勞働者は時々立つて、大きなよきの尻で楔を打込んだ。こーん、こーんと言ふ音は山に響き渡つた。

彼の友は從容として一言も口を利かなかつた。彼は嚴肅な感じに打たれた。

幹は一分傾きかけた。勞働者は起上つて、靜かにその場

を離れた。うめきと共に木は倒れて行つた。どーんといふ烈しい地響がした。その邊の小さい木や草が煽を受けて一度に靡いた。そして尙暫くはざわざわと騷いだ。

それから二週間程すると、拂ひ下げられただけの木は炭になり、又或物は燃し木として少しづつ勞働者によつて運ばれて行つた。その邊一帶に廣々と明るくなつた。小さい木などは不意に日光の直射を受けて、歡喜の聲を擧げて騷いだ。日なたでは暮せない羊齒類はだんだんに赤く枯れはじめた。

切株が並んでゐる。彼はそれを眺めながら淋しい氣持になつた。彼には今まで自分のした努力がこれだけで終

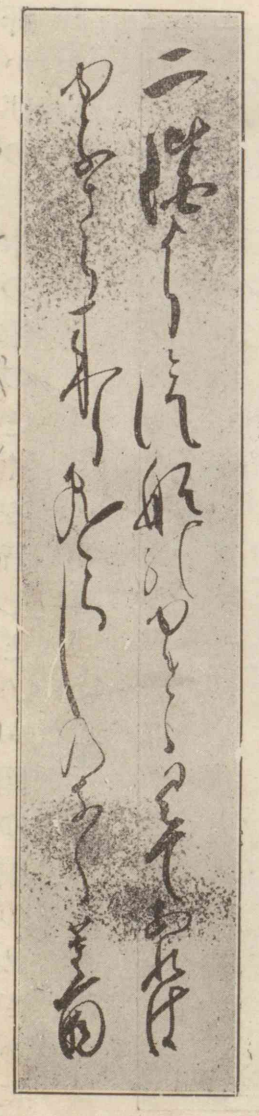
るものならといふ感情も起つた。最初蟲や小鳥が恐しかつた時代から、ナイフ・鉈・鋸とそれらが一つ〳〵恐しいものとして、彼の前に現れて來た事を思つた。小鳥を恐れて居た時にはナイフを知らなかつた事を思つた。而してナイフを知つて恐れ出した時には其の上に鉈のある事は考へなかつた事を思つた。鉈の上には鋸があつた。そして總べてを通過したと思つた時に彼は又更に大鋸といふ物の事を知つた。彼にはもう根氣はなかつた。同時に不安も不滿もなくなつた。併し彼は過去を顧みて、徒勞に歸したその努力を悔いはしなかつた。徒勞と言ふ氣もしなかつた。彼には鋸を通過しようとしてゐた時代のあせる氣分

は、今は全くなくなつた。そして同時に大鋸を知る前の少しだらけたやうな安心もなくなつた。それは如何にも淋しかつた。併しその淋しさの内に彼は或安定を得た。

（白樺の森）

一九　和歌

金子薫園



鳥の影窓にうつらふ小春日に木の實こぼるゝ音靜かなり

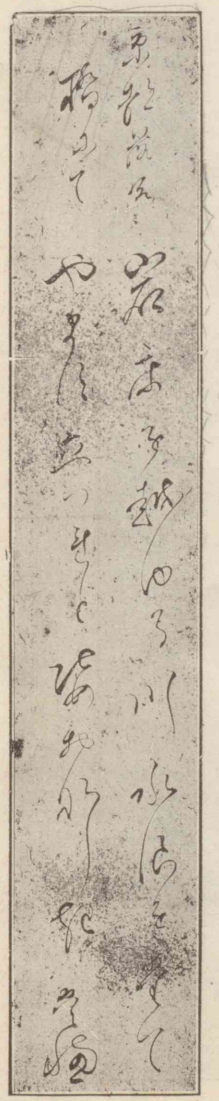
白樺の森　三六七頁―三七三頁。大正七年三月、新潮社發行。

金子薫園　名は雄太郎、明治九年東京に生る。歌人。

薫園筆蹟　二階より汽船のゆきゝ見てあればゆふさり來りひぐらしのなく　薫園

雪とけて濡れつゝ靑き八手葉の畫あたゝかに雫するなり
軒かげの靑木の雪のとくる音しと〳〵聞ゆ朝のめざめに

窪田空穗



我が家をめぐりては降る春雨のかそけき音を聞けば耳に滿つ
闇に咲く野茨しめりそよぐ風はるかにひくゝ燈の一つ見ゆ
わかるほどにしめつぽい茨の花が風にそよ〳〵とみかれて
さわ〳〵と暗きがうちに木の鳴れば空明るくも夏の月出

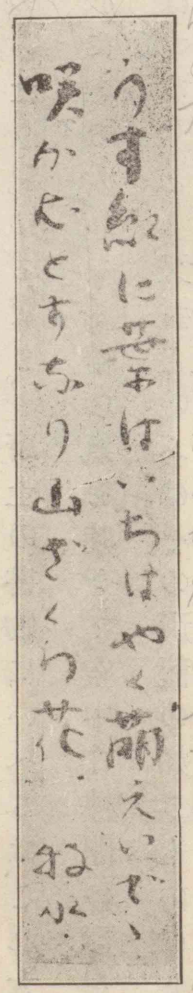
窪田空穗

窪田空穗
名は通治。明治十年長野縣に生る。早稲田大學文科出身。歌人。

空穗筆蹟
京都落合橋にて
岩床を越ゆる川水波をたてやまず立つれど姿おなじき　空穗

若山牧水
名は繁。明治十八年宮崎縣に生る。早稲田大學英文科出身。歌人。

牧水筆蹟
うす紅に葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山ざくら花　牧水



切株はうす紫にわか芽して桐となりけり六月來る日

若山牧水

うら〳〵と照れる光に煙りあひて咲きしづもれる山櫻花
つち踏めど草鞋聲なし山櫻咲きなんとする山の靜けさ
摘草のにほひ殘れる指先を洗ひて居れば野に月の出づ
火の山の裾の松原月かげの疎き月夜をほと〻ぎすなく

（現代詩歌新選）

現代詩歌新選
大正十四年八月・大同館書店發行。

橘南谿
名は春輝、伊勢の人。醫家、文章家。文化二年歿、年五十三。

蘇東坡
宋の詩人、文章家。名は軾、字は子瞻。東坡はその號。徽宗の建中靖國元年（我が紀元一七六一年）歿、年六十。

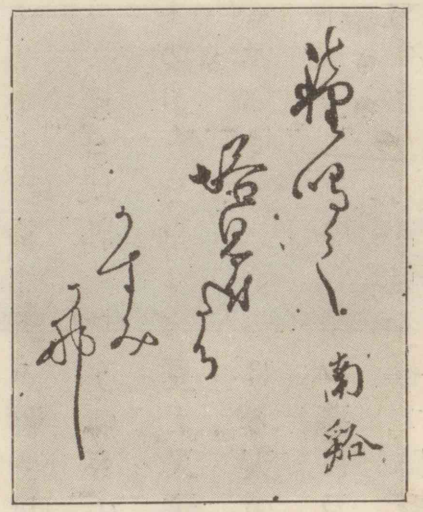
二〇　蜃氣樓

橘　南谿

唐土の詩文にも多く作りてもてはやせる蜃氣樓といふことあり、又海市ともいふ。海上に雲の如くに氣立ちのぼりて、樓臺城郭の形を現はし、その中に人馬往來せるまでもまのあたり見ゆるなり。唐土の書物にいへるは、これ大海の底にある大いなる蛤の氣を吐きて、空中に樓閣の形をあらはすなりと。又蜃といふはその形龍の如きものにして、海中に住んで氣を吐きて樓臺を結ぶなりと。種々の說あり。蘇東坡なども南海に遊びし時、龍神に祈りて蜃氣樓を見、詩を作りし事あり。唐土にては甚だ珍しがりて賞玩することとぞ。

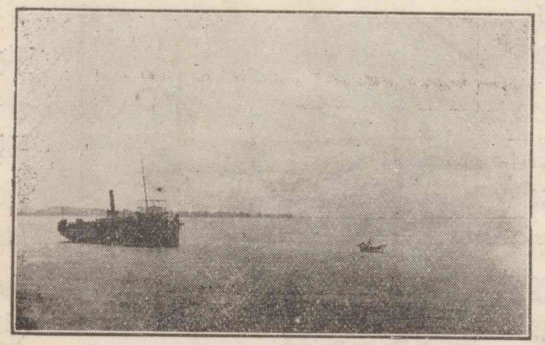
魚津
富山縣下。

橋南谿筆蹟
鐘鳴て塔見付たるかすみかな　南谿



我が國は四方皆大海にて、何れの國の人も海を見ざる者もなきにこの蜃氣樓は甚だ稀なり。只越中の魚津といふ處に毎年三月の末より四月の間に天氣殊にのどやかにして、風收り、海上霞み渡りて、一面の鏡の打曇れるが如き日に、この蜃氣樓を結ぶ。毎年一兩度、或は多き年は三四度も結ぶことあり。誠に唐土の人のいへる如く、海上に烟の如く雲の如く、次第に結び來りて、遂には樓臺の如く、或は城郭の如く、人

馬往來せるが如きも歴々として見ゆ。北地に我が親しく交りし宮島式部大夫といふ社人は、折よく魚津にてこれを見たり。初は幕を引けるが如くなりしが、暫く見る間に、城郭の如く矢倉・高塀やうのものも見え、矢間などの如きものも見え、又暫くする間に、松原の如く、繪にかける天の橋立などのやうに見えけるが、夕暮に及び、風少し出でたれば、漸々消失せて跡形も無くなりしとなり。富山よりは纔かに六里を隔てたる處なれば、城下の人々皆見物したく思へども、何時に結ぶも知れ難く、又



結びたる時、急に人して告げしらすとも、その間には消失せて見るべからず。この故に魚津近處の海邊の人は、例年見ることなれど、二三里を隔てたる地方の人は、一生涯遂に見ざる人多し。

余が越中にありし時も、三四月の間を魚津に逗留して蜃氣樓を見るべしと、人にも勸められ、余も亦年頃の望なりしかど、富山にありし頃は、正月・二月なれば、それより三四月迄越中に逗留せんこと餘り永々しければ、殘念なりしかども見ずして越後に越えたり。越後の糸魚川にて、松山茂肅にこのことを語りしに、この人も、「糸魚川の海中遙かに山の出來たるを見たり。漁人のいひしは、これは鹽山といふもの

糸魚川　新潟縣西頸城郡。

松山茂肅　名は造、越後糸魚川の儒者。

にて、折々見ることなり。」といひしと語られき。余初め唐人の作れる詩などを見て思ひしは、蜃氣樓は大洋にあることにて、陸地近き入海にはなきことの樣に心得しが、魚津の地理を見るに、さにはあらず。魚津は北海に臨める地なるに、向ふの方七八里と思ふ程に、能登の國の山を屏風の如くに見る東よりの入海なり。海中より蒸登る陽氣、向ふの山に映じて、色々の形を見しむるなり。向ふに當なく、數百千里見晴したる大海にては、陽氣登るといへども、向ふの當無ければ、映ずることなくして人の目に見え難しと覺ゆ。伊勢の桑名の海にも、三十年五十年の内にはたま〳〵蜃氣樓を結ぶことありといふ。これも向ふに尾張三河の山を受

桑名　三重縣桑名郡。

けてある故なるべし。また安藝の國にてもたま〳〵はありといふ。これも向ふに山あり。その外の國にては、蜃氣樓を結ぶこと未だ聞かず。奇を好む人は、三四月の頃越中に遊びて、この樓臺を見るべきことなり。

（東遊記）

東遊記　十五卷。東國諸方を漫遊せし時の紀行。本課の文は卷三に出づ。

幸田露伴　名は成行。慶應三年東京に生る。文學博士。

二　椿

幸田露伴

梅の精神あるにしもあらず、櫻の風骨あるにもあらねど、椿は捨て難き趣あるものなり。名も無き村の藪の下道、何とも知らぬ小社のあたりなんど、鵯の二羽三羽高鳴して去る時、はらく〳〵と紅き花の重げに碎け散る風情、餘の花には見難きをかしさあり。伊豆は大島の泉津近くに、一路清く

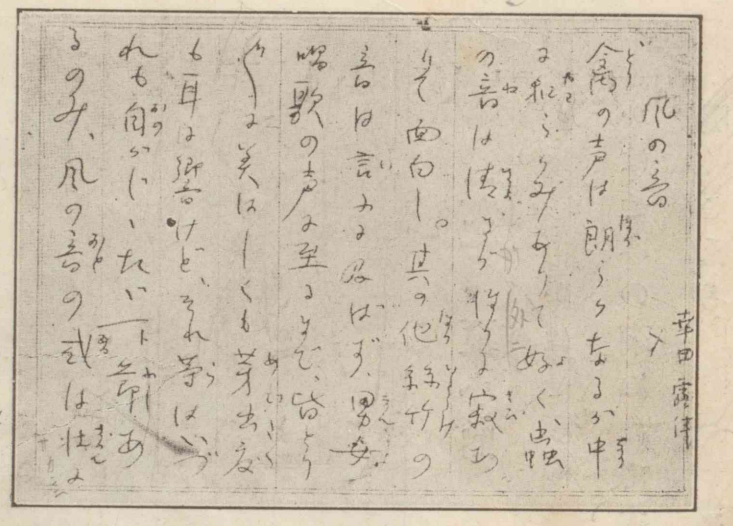
椿と小禽

塵無うして、ただこの花のみはらゝきこぼれたる、長閑さ云ふべくもあらずおぼえき。

赤きもよし。絞ざきもよし。紅にして單瓣なるは品高く、翠葉瑯玕を展べて紅花珊瑚濕へるすがた、茶壁のさびに籠花生の小手の利きたると映り合ひては、おもしろさ言葉に絶えたり。

絞ざきは床のものにあらず。閑庭に遲日渡りて、春の土に陽炎燃ゆる中を、猶切禿か垂髪ほどなる女の兒の、餘念も無く糸貫きて華

露伴筆蹟



鬘といふものめきたるを造りて、遊べるなどには、特に似合はしく艶にして好し。

乙女椿は餘りに美しく、餘りに整ひて、却つて情足らず、貝細工めきて見ゆるが口惜し。白玉は氣高く尊く、わびすけはわびて拗ねたり。花を記したる古書を讀めば、早くよりこの花の類の世に出づること多く、古より人の愛ではやしたりしが知らるれど、さまざまの名は

椿之圖

洗心廣錄　一二九頁―一三〇頁、大正十五年六月、至誠堂發行。

三木露風　名は操、明治二十二年兵庫縣龍野町に生る。詩人。

二三　夏小曲

かはせみ

かはせみの羽ぬれてすずしや
鳴くこゑも。

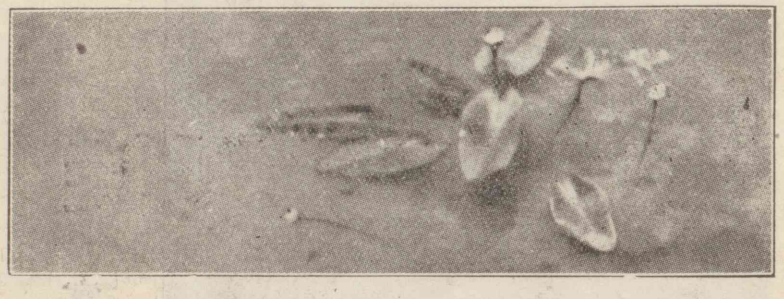
おぼえんもこちたし。ただ紅きも白きも室内には單瓣よろしくて雅味饒く、戸外には複瓣おもしろくて、野趣豐かなりといひ定むべくや。

（洗心廣錄）

三木露風

河骨

青き樹かげ　五七頁―五九頁。大正十一年七月、新潮社發行。



青葉の靄は霽れゆきて
明くるにはやし川の宿。

つばめ

夏來たりけり、つばくらめ
飛交ふ街の時計臺
白き正午をさし示す。

白鷺

をぐらき、ふかき森の
隱り沼になく白鷺よ
河骨の花ほのかに
風の來てゆらぐ夕暮。

（青き樹かげ）

下村宏　明治三十一年東京帝國大學法科出身。大阪朝日新聞社員。法學博士。

湖心　河口湖の中心。

河口湖　河口湖は甲斐の國富士山の北にある大湖、面積二千二百町。富士八湖の一。

東宮殿下　今上陛下の皇太子殿下御時代の事。

二三　富士八湖

紀行文　下村宏

船は湖心に浮ぶ逆富士の影を亂しつゝ、日本武尊の凱旋式を擧げさせられたといひ、又近く東宮殿下の御立寄りになられた鵜の島をあとにし、左舷富嶽の秀峰を前にし一帶の松並木を望む。

長濱に上陸して登ること約六町、隧道を拔けると、西湖の濱に出で、又船上の客となる。船は反和の山を後にし、

西湖　甲斐國、精進湖と河口湖との間にあり。面積六百町。富士八湖の一。

西湖

楚君　杉村廣太郎、楚人冠と號す。

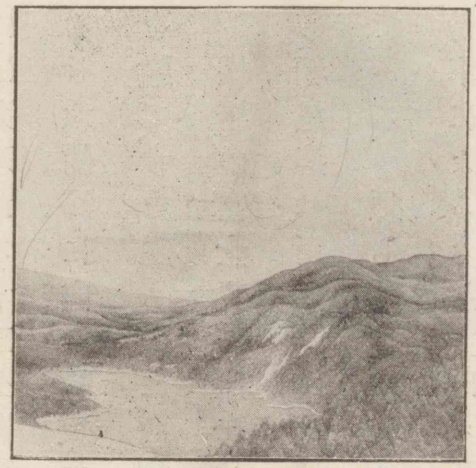
右には突兀たる十二ケ嶽の群峰を仰ぎ、前は蓊鬱として際涯なき大樹海に向ひ、靜寂なる西湖の波を蹴て、十分足らずに西端根場につく。

根場の富士見茶屋に休む。これから精進迄は所謂青木が原の大正道路である。須らく徒歩たるべし。若し馬車によるも、途上時々下車して、千古斧を入れざる處女林の土を踏むべしといふ。暑いことも暑いが楚君と二人、茶屋の亭主に荷物を持たせて、漆黑なる熔岩をふみ、苔蒸し石朽ちたる青木が原の大樹海に

富嶽

入る。

樹の海のしづけき中に
たちてあれば
わがつく息のわれにきこゆる



青木が原の逍遙、さては精進湖畔の一夜、殊に烏帽子ケ岳俗にパノラマ山の絶景、左右に本栖・精進・西湖・河口の湖水を下瞰し、後には八ケ岳及び南アルプスの高嶺を望み、左十二岳・三坂峠の連峰に對し、右遙かに駿豆

右同

新聞に入りて

「富士八湖」二五四頁。大正十四年十二月、日本評論社發行。

海洋を眺め、前面は淨化せられたる太古のまゝの樹海の上に、大室山を抱きて富士の連峰は雲表を摩してゐる。この境致は到底名狀し難い。

楢の樹のみどりが中に
湖の
あさの光に
かがやける見ゆ

（新聞に入りて）

二四　精進より身延へ

杉村楚人冠

杉村楚人冠　名は廣太郎、明治五年和歌山市に生る。大阪朝日新聞記者。

精進湖　甲斐の西八代郡にあり。面積六百町。富士八湖の一つ。

海南　下村宏の號。

西湖から精進湖までの間には、青木ケ原の樹海とて千古斧鉞を入れざる大原始林があつて、こゝは歩くに限るのだと海南がいふので、ついその氣になつて二里ばかりも歩かせられた。

行けども行けども樹ばかりの中を通つて、もう森を出はづれようといふ處に御殿庭と唱ふる處がある。二百坪ばかりの打開いた處に溶岩と樹木との配置が面白く出來て、さながら人工を加へた庭のやうに見える。

息のつまるやうな森の中を出離れて始めてほつとした。

輕井澤　信濃佐久郡離山乘船場より西湖と碓氷峠の間にあり、標高九百米、盛夏の頃避暑客多し。

アルプス　日本アルプスのこと。信濃・越後・越中・飛騨・甲斐の諸高山の稱。

溫泉ケ嶽　肥前國高來郡。島原半島の鎭山山腹に雲仙溫泉あり。

三津　伊豆にあり。

精進の湖岸に出て又ほつとした。夕靄のわづかにかゝつた湖水を中にして、四方は綠樹鬱蒼たる山々に取圍まれ、湖水の中には珊瑚礁のやうに溶岩の一帶が露出してゐるのも趣を添へた。精進ホテルが遙かに森の間から隱見する。三十六年も前からこんな邊鄙なところへホテルを構へた米人ホシノさんの料簡が今更のやうに驚かれる。思へば輕井澤といひ、アルプスといひ、溫泉ケ嶽といひ、三津といひ、外人に開かれた日本の名所は少くないが、こゝほど思ひ切つた

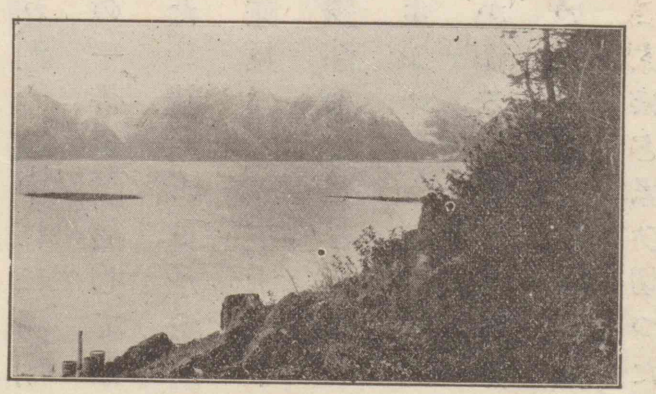
のはあるまい。

小舟で湖水を渡つてホテルに着く。

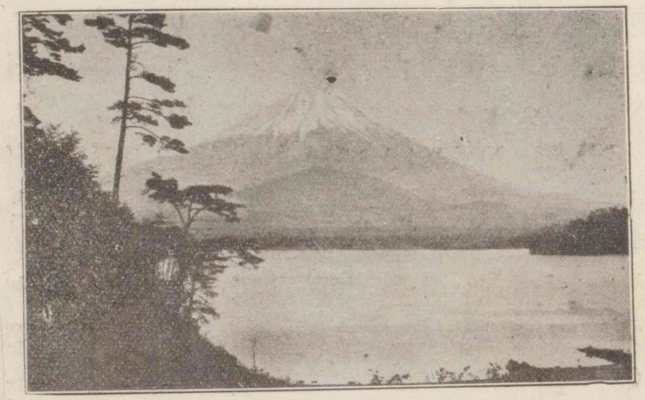
瀟洒な構へだ。部屋におちつけば、巒氣爽涼さながら秋の如し。こゝには蚊がゐないといふので、昨夕一晩船津で蚊に苦しめられた身は殊に嬉しく覺えた。湯に入つて浴衣一枚になつて、樂々と足ふみのばして新聞をよんでゐると白雲搖曳して窓に迫る。如何にも人間臭い浮世を離れた氣がして來る。如何にものびのびすると海南博士がいふ。

船津　甲斐の國。都留郡、河口湖の南。

本栖湖



脚下に二つの湖水を見下す。右なるは本栖湖、水深うして紺碧の色をたゝへ、左なるは精進の湖、水も色も共に淺い。精進湖を隔てて彼方に、青木ケ原の樹海が連なり、その彼方に西湖が見え、西湖の彼方遠く山の峽から河口の湖が見える。富士の高峰はちやうどわれらが正面に、さながら宮仕へする女が裳すそを長く引きはえたやうな形をして立つてゐる。こゝ烏帽子ケ岳の頂上の眺は世にこれにたぐへつべきものがあるとも思はれぬ。かやう



に南の方富士を正面にして東南に四湖を一眸の下にあつめ得る事とて、烏帽子ケ岳一にパノラマ臺と唱へられて、その名の方が此の邊でよく通じる。これもホシノさんが開いて名をつけたのだといふ。精進から登り二十五町、前年攝政宮行啓の折に改修したといふ立派な道がつけてある。

われらは今朝未明に精進を立つて、強力と共にこゝに登つた。海南博士この景を見て感歎措かず、忽ち新しいところを一首口ずさむ。

か黑き富士の斜面は遠く〳〵
天の一方に線を劃せり

とある。

（二四　精進より望延）

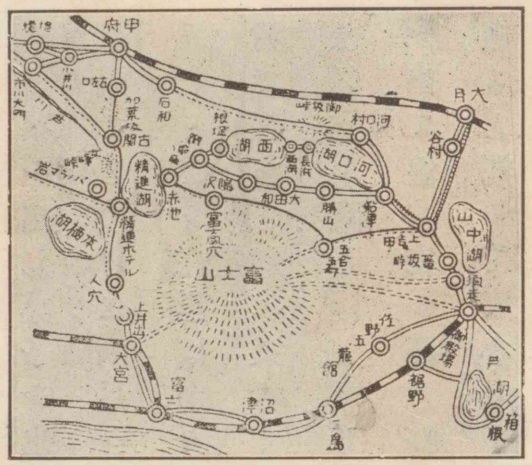
富士　瑞雲　瑞雲

渡邊華山

田原の藩士、幼にして儒に志し又畫をよくす。谷文晁、朱紫山金子金陵の諸家に從ひて畫法を討究し、積年强學遂に諸家を折衷し、古法に則りて一家を成す。筆力勁健にして圖樣奇拔なり。華山常に海防の忽にすべからざるを憂ひ、國學を修めて西洋の事情を審にす。後藤府の忌諱する所となり、其の國に幽せらる。天保十二年十月十一日憂憤して自盡す。年四十九。

大宮
大宮町。駿河の國富士郡。富士登山の表口。

富士八湖略圖



左に本栖湖の紺碧を見下し、これを隔てて富士が峰の翠微を見上げながら烏帽子ケ岳を西に下る。右の方は山岳重疊して指顧の間にある

精進から大宮へは道も開けて馬さへ通ふさうながこの身延街道は物ずきな外國人が一夏に三四組通るきりで、日は眞向から照りつけて涼を納るべき木影とてもない上に、何處までも道は爪先下りとなるので足の痛むこと一通りでない。

至るところに桔梗が可愛らしく咲いてゐる。

古關　甲斐の國西八代郡。

下部　甲斐の國八代郡。毛無の西麓、鑛泉あり。

信玄　武田信玄。

下山　甲斐の國南巨摩。身延山の東麓。

やつと古關といふ小さな村に着いた。茶店も何もないから、内藤といふこの村きつての舊家に入つて休ませて貰ふ。茶を出し、菓子を出し、洗足の水を出してくれる。靴をぬいでこの水に兩足をつき入れると涼味が全身に行渡る。

行くこと二里ばかりにして富里といふ處に出る。下山村で强力と別れ、又行くこと一里にして下部に着く。下部は信玄の隱し湯と稱して沃度を多量に含んだ生溫い溫泉が出て、溫泉宿が四五軒立列んでゐる。これから先は車があると聞いて安心して溫泉に浸る。七里の山路を日盛りにすたこら歩いて來て溫泉に入る心地は又なく快い。

夕方下山まで車を飛ばし、富士川の鮎のあざらけきを味

新聞に入りて　「精進より身延へ」二五六頁―二六一頁、大正十四年十二月、日本評論社發行。

德富蘆花　名は健次郎。蘇峰の弟。熊本縣の人。同志社中途退學。文學者。小說家。昭和二年九月伊香保にて歿。年六十。

息栖宮　茨城縣鹿島郡中島村にあり。住吉三神（表筒男・中筒男・底筒男命）を祀る。

德富蘆花

はひ臥床に入る。その夜珍しく大雨。

（新聞に入りて）

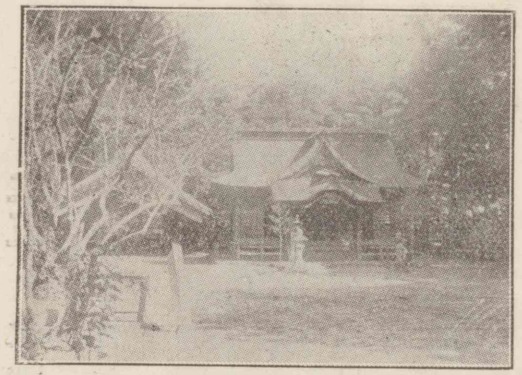
二五　水國の秋

德富蘆花

眼さめて戸を開けば卽ち利根の長江。息栖宮の大鳥居は水中にそばだち、一里向ふなる小見川の里は猶蒼き朝霧に睡りつ。耳を澄ませば向岸の鷄聲ほのかに聞ゆ。廣々としたる利根の川づら眼を遮るものもなくて、心も澄むばかりなり。程なく日出でて、岸の藁屑に置きし朝霜きらきらと光り、水蒸氣立つ水の面、處々磨澄ましたる鏡の樣に閃

く頃、起出でし村人三々五々來りて江水に嗽ぎ、今柵を放たれし家鴨は刮々と騷ぎつゝ水に跳込む。中流には已に白帆の影あり。岸には村人の語る聲凛として朝の空氣に響き、稻を載せ馬を載せて出づる舟あり、網を載せて出づる舟あり。

息栖宮



朝餐の膳に向へば、汁も膾も皆鯉なり。昨夜鯉網をあげて二百貫目の漁獲ありたりと云ふ。息栖の宮に詣で、午前十一時潮來に渡るべき小舟を傭ふ。息栖より潮來まで三里。舟賃は三十錢なり。

潮來　茨城縣行方郡潮來町。

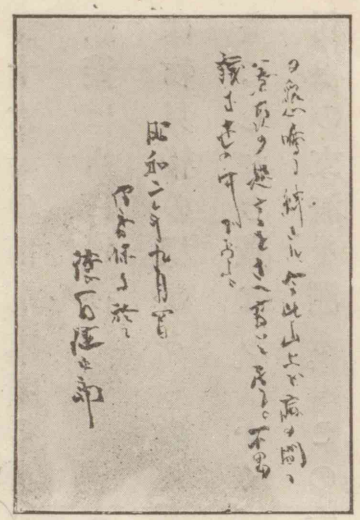
小春の日和麗かに晴れて、暖日櫓聲睡を思はしむ。舟は蘆の茂りし中洲に沿ひ、また左の岸に沿ひつゝ、深きに搖櫓し、淺きに棹さし行く。水村の趣何處も同じことながら、このあたりは景色殊に優れ、川水の鏡の如く光りたるに、空行く白雲・汀の枯蘆・蘆間隱れの茅舍・屋後の林・繫ぎし小舟・汲水に菜洗ふ村の女まで殘無く影を映し、舟脚の行くまゝに水ゆらゆらと搖ぎて、蘆影・柵影・人影・舟影一時に伸びつ縮みつ。遠くより望みし一村林來て見れば何の神

を祭れるにや、汀に古き鳥居の立てるあり。水鳥の立つ下より、一艘の鰕捕る小舟のさわ〳〵と枯葦を分けて出づるもあり。或は圓筒形の竹籠樣のものを、三尺ばかり隔てて幾個ともなく水に浸し、繩もて列ね、竿を立てたるを、小舟を足もて動かしつゝ、一つづつあげ見る者もあり。こは鰕或は鰻を捕るなり。

わが舟の船頭は他の舟に逢ふ毎に、聲かけて行く。麗かなる日の水の上は、殊更人語の清く聞ゆるものなり。三町あまり離れし渡船の中に、村の男女の笑ひさざめく聲手に取る樣に聞ゆ。賀村にいたれば、中洲盡きて、河幅俄に廣うなり水は三叉になりぬ。西は佐原より東京に通ふ利根の

賀村　茨城縣鹿島郡中島村の大字。
佐原　千葉縣香取郡の町。

本流にて、北は所謂北浦なり。水青々として見る眼遙かなるに、白帆三つ四つ、鹿島は何處ならんと打眺めて行く。このあたり水甚だ淺く、水を出づる蒲の根あれば、藻草の水に浮ぶありて、舟は時々流砂の暗洲をなせるに、腹を摩して行く。魚鰕を集むる爲に、處々水中に竹の柵を設けたるが、或は傾き或は斷え、其の絶間々々より空や水、水や空なる碧の漏れて、寸ばかりの白帆、掌に載せつべき遠山の見え隱れするも長閑けき限なるに、漁舟三つ四つその蔭に往來出沒して、何處ともなく欸乃聞え、魚を驚かす



北浦　茨城縣鹿島・行方二郡の間にある沼。
鹿島　茨城縣鹿島郡の町。鹿島神宮あり。

とて棹もて舷をほと〳〵と敲く音も聞ゆ。舟は北浦の口を横ぎりて進む。鹿島の方より材木を積みて來る舟の洲に乘りあげて、舟人汗になりて棹さす見ゆ。

十六島の南端、大崎の鼻には漁家二三。網は門にあり。魚籃は水にあり。竿に簑を乾し、杭に舟を繫ぎたり。裏には物見櫓の樣なるものあり。鮭の見張をなすなりと云ふ。畫にしたき景なり。かくてこの十六島を左に見て、所謂北利根の支流を溯る。この十六島は新島村と稱し、三千餘町歩の田あり。九萬石の收穫ある大村なり。頭は霞ケ浦にあり、尾は北浦にあり。利根の本流は右、北利根は左、横利根は頭の方を斜に限りたるものにて、若しこの島なくば石納

十六島　千葉縣香取郡と茨城縣稻敷郡とに跨る低洲。今、新島村・十餘島村・本新島村に分つ。

石納　茨城縣稻敷郡本新島村の大字。

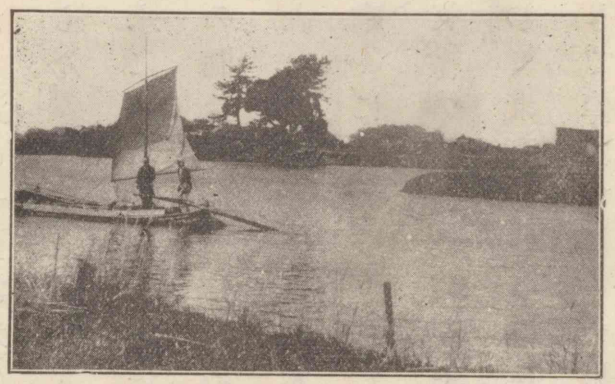
佐原のあたりより賀村・津の宮あたり迄は、一面湖水の如き流とならん。現に去月の大水にて、全島水に沒し、潮來より佐原まで三里の間を、舟は直に島の上を往來したりと云ふ。今は水落ちたれど、處々に溜あり。岸に乾したる稻も雀の餌にだに足らざるべく見ゆ。北利根に入りてより、櫓を措きて、棹にて行く。川幅甚だ狹ければ、舟はさわ〳〵と蘆押敷きて進み、蘆花はら〳〵と面に

津の宮　千葉縣香取郡の村。

水郷の圖

降りかゝる。一句なかるべからざる所なり、島の方には所所櫪を設け、本地の方には汲水ありて女などの大根洗ふ見ゆ。鯉網・鰕柵は到る所に設あり。如何にして通るやらんと思へども、舟人は巧にその間を棹さして行く。

午後二時潮來に着き、角菱と云ふ宿に投ず。上に松・杉の茂りたる稻荷山あり。前に北利根の流あり。粉壁瓦鱗參差として千百戸、流石に古き所にて趣あり。



潮來渡舟

蘆花全集　第三卷「青山白雲」三三六頁―三三九頁。昭和四年二月、蘆花全集刊行會發行。

新井白石　名は君美。將軍德川家宣の侍講。政治家。享保十年歿。年六十九。

二六　父母の思出

新井白石

わが父にておはせし人は、われ物覺えしよりは髮に黑きすぢはすくなかりき。面は方におはしまして、額上高く起り、眼大きく、鬚多く、たけは短くおはせしかど、すべて骨ふとく、たくましく見え給ひたりき。

天性喜怒の色あらはれ見え給はず、笑ひ給ふにも聲高く笑はせ給ひし事は覺えず。まして人を叱り給ふにも荒々しき事のたまひし事は聞かず。物のたまふ事もいかにも言葉すくなくして、たち居輕々しからず。驚き給ひ、さわぎ給ひ、事に堪へかね給ひしなどいふ事は見しことあらず。

たとへば灸治などし給ふにも、灸小さきと數すくなき時は無益の事なりと仰せられて、大きなる灸をその數すくなからず、五所も七所も一時にすゑさせていたみ給ふけしきも見え給はず。

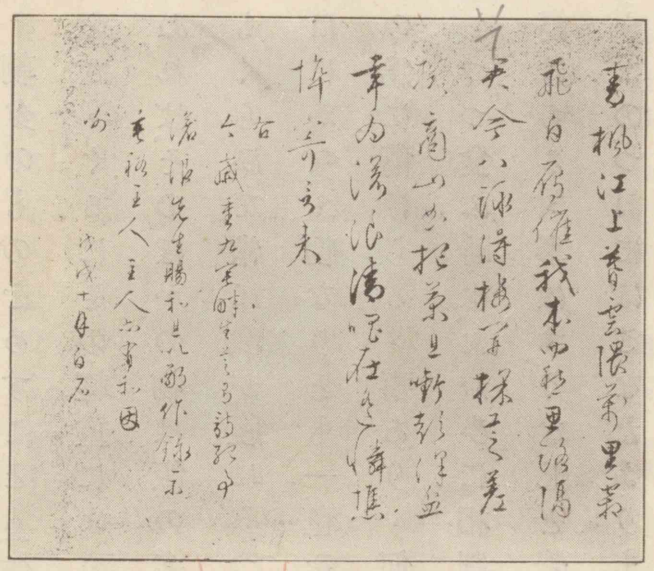
新井白石像

身靜かなる時には、つねにおはしまする所を淨く掃ひて、壁上に古畫をかけて、花瓶には春秋の花をすこしくさしはさみて、それに對して、默坐して日を消し給ひ、又みづからの繪かき給ふことなどもあり。それも色を設けたることなどをば好み給はず。身の病み給ふ時より外は、人をめしつかひ給ふといふこ

ともなく、何事も手づからみづからのみなし給ひたりき。朝夕のものをめすことも「飯は二椀を過さず。手づして椀をさゝぐるに、その輕重によりて飯の多きすくなきはしれぬれば、そのほかの物は飯の多少によりて、多くもすくなくもくらひて、常に我が腹にみつる分量をすぐすべからず。口にかなふ物なりとも一色をのみ多く食ひぬれば、必ずその爲に傷けらるゝ事あり。何物もえらばずして皆々すこしづつ食ふ時は、たがひに相制する所あるにや、食のために傷けらるゝ事はすくなしと覺ゆるなり。」と仰せられき。

よのつねにはこなたよりまゐらする物をめして、なに物をまゐらせよとのたまひし事はあらず。ただ四時の新味

白石筆蹟



をばその出で來りし初に、なにものに限らず參らせよと仰せられて、家人と共にきこしめしけり。

身にめしける物も、家におはする時は洗ひすゝぎしものをもめしけれど、あかづきぬるをば、いね給ふ時もめす事なく、門を出で給ふに至りては、かならず新しくあざやかなる物どもをめす、それも身におひ給はぬ品を用ひられし事はあらず。昔人はつね

代々の集　古今和歌集以下の勅撰和歌集。

に身死しなん後の見ぐるしからぬやうを心にかけしなりなどのたまひたりき。

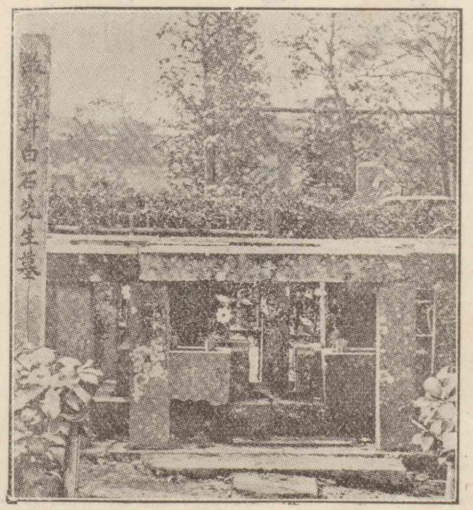
我が母にておはせし人は、ものよくかき給ひしのみにあらず、歌の道をもつたへ習ひ給ひて、代々の集または物語の類など、我が姉妹によみ教へ給ひ、圍碁將棊なども堪能におはして、これらの事をも我に教へ給ひたりき。香爐箱のうちに琴のつめを袋にして入れおかれしを見し事あれば、これらの事をもすき給ひしにや。

我が物覺えしよりは、織縫ふ事こそ女のわざなれと仰せられて、年ごとに美しき筋の布と、色々のあやあるきぬを、みづからも織り、人にも織らせて、父にもめさせまゐらせ、我に

もたまはりたりしものは、今はわづかに殘れるあり。

世の諺に、似たるものの夫婦とはなるなりといふ事のあるが、物のたまひ、なし行ひ給ふ事どもの、父にておはせし人にたがふ所なくてぞおはしましたりける。

父の致仕し給ひし後には、これも髮おろし給ひて佛の道をいみじく行ひ終り給ひし。年は六十三になり給ふと仰せられき。



（折たく柴の記）

新井白石の墓

校註折たく柴の記　明治四十四年九月、實山堂書房發行。

坪内逍遙　名は雄藏、美濃の國の人、東京帝國大學文科出身、文學博士。

正成　姓は楠木氏、河内の人、延元元年湊川に戰死、年四十三。

多聞丸　楠木正行のこと。正平三年四條畷に戰死、年二十三。

二七　幼な正行

坪内逍遙

高足二重舞臺。正面に佛壇。よい處に錦のきれに包んだ正成の首桶がすゑてある。その前に多聞丸の母、正成の奥方うしろ向に坐つて、今ちやうど經文を讀誦し了つた體。

奥方　（低く）「南無尊靈頓生菩提。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。」

と、よろしくあつて、經机をかたづけて、正面へ向きなほり、

人盛なる時は天に勝つとかいふが、朝廷の御運命もいよいよ末となつたのか？　おほみ柱とも賴ませられた、その楠の幹は枯れて殘つたはかよわい細枝ばかり。……かはいさうに、生れついて病身な多聞丸、櫻井でのあの御教

訓を忘れなければこそ、子供心にも、行末を案じ過しての
あの病體。どうせ知らせねばなるまいとは思ふけれど、
若しお討死のことを
知らせたなら、さぞ驚
くことであらう。……
それはさうと、あの世
瀬川祐隣を使者に立
てて、わざわざお首級
を送つてよこした足
利方の心の底が呑込めない。身方の勇氣を挫かうため
の計りごとか。それともまたこの深切を餌に……(と、思入

櫻井驛訣別の圖

恩地左近太郎
正成股肱の臣、後正行を助けて兵を擧ぐ。

れあつて)いづれにしても油斷はできない。
と、思案の思入れ。この時腰元甲下手から出て來て、
腰元「奥さまへ申上げます。
奥方は無言で靜かに腰元の方へ顏を向ける。
恩地左近太郎どのが密々で申上げたいことがあるとお
つしやいまして、只今おいでございますが、いかがいた
しませう?
奥方「すぐに逢ひませうから、いつもの一間で待つてゐるや
うに言つておくれ。
腰元「かしこまりました。
腰元はいる。奥方思入れあつて、

奥方「かはいさうだけれど、いつその事、ありのまゝに知らせませう。さうして覺悟させて、夫の志を繼ぐやうに教訓しませう。

とよろしくあつて下手の奥へはいる。暫くは空舞臺。と上手の奥、佛壇脇の襖をあけて、多聞丸太刀を杖代りにして、あたりを窺ひ〳〵出て、佛壇の前へ進み、そつと首桶の包をおろし震へる手で包を解く。と、正成の生首が出る。

多聞「おゝ！

と思はず聲を揚げて泣きかけたが、上手を見て、きつと袖を嚙み、こらへて、聲を立てずに、泣きながら、

朝敵のやつらが神樣のやうに怖しがつてゐたお父さまでさへ、こんなになつておしまひになつたんだもの！意

氣地のない僕なんかが、どんなに一生懸命になつたつて何になるものか！もう駄目だ！もう駄目だ！……お父さま！櫻井でのあの御教訓は、僕は決して忘れやしません。お別れして歸つてからは、夜もろく〳〵寢ないくらゐに、始終考へてばかりゐました。けれども、こんな弱い意氣地のないからだではとてもお父樣のお志は繼げません。ぐづぐづしてゐると、軍にも出ないうちに、病氣で死んでしまふかもしれませんから、お父さま御遺言に背くやうで濟みませんけれど、どうぞあの世へお供することをお許し下さいませ。

と拜をなし、すぐ下手奥へ向きなほつて、

乙若　楠木正時、正行の弟、四條畷の戰に正行と共に戰死す。

お母さま。お暇乞もしないでお先へまゐります。お許し下さいませ。

と言了ると、すぐに腰の短刀を抜き、腹を切らうとする。この少し前から様子を窺つてゐた腰元菊野と多聞丸の弟乙若が上手の奥から駈けて出て、菊野は短刀を持つてゐる手をおさへる。

菊野「あゝもし、あぶない！何を遊ばす？まあ、このお手を！

多聞「はなせ〳〵。

菊野「いゝえ、まあ、このお手を！

乙若（あちこち駈廻つて）「お母さま！お母さま！お兄さまが！

と、下手の奥より奥方急ぎ足で出て、この體を見て、つか〳〵と寄り、多聞丸の短刀を持つてゐる右手の肱を中啓でちやうと打つ。と短刀を落す。

正行と母の圖

多聞（見上げて）「お、お母さま！（と、うつむく。）

奥方（じつと見つめて靜かに）「だれかにお討死のことを聞いて、わたしの許をも待たず、勝手にお首級にお目にかゝり、悲歎のあまりに取亂しましたね。（ちよつと間をおいて、）まだ幼少ではあるけれども、お前は正成どのの嫡男で、楠家の世繼ですぞ。今改めて言聞かすことがあります。心を落

着けて、ようお聞きなさい。（と、形を改めて）御生前にお父さまが何とおつしやつた！『不俱戴天の逆賊といふのは、朝廷をないがしろにし奉つて、我意をほしいまゝにする足利兄弟、あの兄弟を滅ぼして主上のお心を安め奉るまでは、たとひ幾たび軍に負けて、一族が全滅しようとも、七生までも生れ代つて、朝廷のお守りをせんければならんぞ。きつとこの言ひつけを忘れるな。』と、くれぐれも繰返しておつしやつたその御遺言を承つて、大責任を抱いてゐる身でありながら、むざむざ犬死をしようなどとは。もうあの櫻井での御教訓をお前は忘れてしまひましたか？何といふつけ者です、お前は！

と手強く、眼に涙を浮べながら睨みつけて言ふ。多聞丸顔を上げかけて泣きながら、

多聞「いゝえ、決して忘れはしません。忘れなければこそ覺悟をしたのです。からだが弱くつて意氣地のないわたくしですから、とてもお父様のお志を繼いで、大きなお役目を務めることはできないと思ひますから、なまなか恥をかくよりも、せめてお父さまに殉死をして……。

奥方「なに、とてもお志を繼ぐことはできない？とてもとはだれがきめました？お志を繼ぐことは出來ないと、自分で見限つてかゝるのが、……さういふ根性が意氣地なしです。なまなか恥をかくよりもと言ひましたね？朝廷

のお爲に、國の爲に不俱戴天の逆賊を打滅さねばならぬ大責任を控へてゐながら、一身の恥なんぞを思ふいとまがありますか？一身の恥はわたくし事です。叶はないまでも朝敵を、一太刀でも、かすり疵なりとも負はしたいと思ふ心はないのか？

と首桶へ思入れして涙聲になり、

お父さまの御無念を晴らして上げたいといふ心はないのか？

と落ちてゐる短刀を取つて、いただいて、

この菊一文字はお前に逆賊を討たせる爲にとてお遺しになつたお形見。おれの首を見たら、これで腹を切れと、

よもや櫻井の驛で、おつしやりはせなからうが！生れつきのうつけ者でもなかつたのに、どうしてそんな意氣地なしになりましたぞ？

と泣く。多聞丸も泣く。菊野も泣く。乙若おろ〳〵して多聞丸に、

乙若「お兄さま、早くわるかつたとお言ひよ。よ、お母さまにお詫した方がいゝよ。よう！

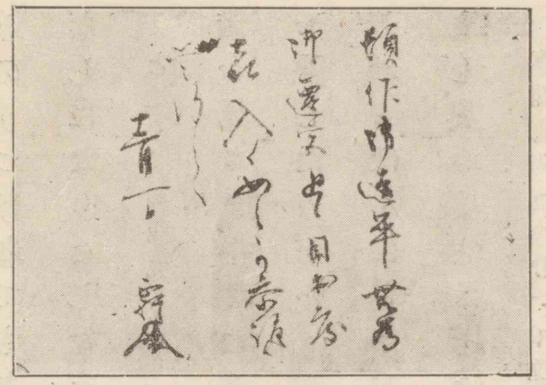
菊野「おゝ、ほんにさうでございます、早くお詫を遊ばせ。……もし、奥さま、どうぞまあ御勘辨遊ばしまして。

多聞丸尙うつむいて泣いてゐる。

奥方（涙を拂つて、きつとなつて）「これほど言つても、合點が行きませんね。……このお首級を送つてよこしたのは、明らか

に敵方の苦肉の計略です。わざと情を施して身方の勇氣を挫かうといふ手段に相違ありません。それにうまうま乗せられて、自殺しようとするやうな、女々しい、意氣地なしに、夫の志を繼げないのは當り前です。よろしい。もうお前なぞを頼りにはしません。この上は、女でこそあれ、わたしが夫に代つて……

と言ひさして、菊一文字を取り、ついと立ち、すぐに下手へ行かうとする。菊野あわて



て、

菊野「あ、もしお腹立は御尤もでございますけれど、どうぞまあ御勘辨遊ばしまして。まことに失禮でございますけれど、なほわたくしからも申上げますから。

と乙若も前へ廻つて、

乙若「お兄さまをどうぞ許して上げて下さい。ねえ、お母さま！お母さま！

奥方（小聲で）「お前方の知つたことぢやありません。おどきなさい。……おどき。……えゝおどきといふに！

と爭ふ。この時和田和泉守（五十五六）恩地左近太郎（四十ぐらゐ）の二人下手の襖をあけて出で來り下手に坐つて、

和田「はつ、お取次も待ちませず、推參いたしました失禮の段

を平に……

恩地「御容赦下さいませ。

と恭しく平伏する。和田は手に足利方の大將分の兜を捧げてゐる。

奥方「おゝ、だれかと思つたら、和田和泉守。恩地左近太郎。

と思入れあつて靜かに上手にすわる。乙若、菊野はそのうしろにひかへる。

和田「先刻左近太郎より申上げた件につき、更にお指圖を願ひませねばならん火急の儀がございまして、參上いたしましたが、お腰元より御持佛堂にと承り、只今お次まで推參いたし……

恩地「圖らずも、御教訓を拜聽しまして……

和田「そぞろに感涙にむせびましてございます。

と二人涙を拭ふこなし。

奥方「聽いたとお言ひの上は、改めては話しませんが、病身とは言ひながら、あんまりな多聞丸の臆病根性。この樣子では、だれが夫の遺志を繼いで朝廷を守りませうぞ？二人とも察して下さい。

と言ひつゝ、こらへかねて顏をおほひ、泣く。暫くの間無言。舞臺しんとなる。と、和田は靜かに多聞丸の傍へ進み、持つて來た兜をその前へ据ゑて、

和田「若樣、これを御覽遊ばせ。これは昨夜竹童が大殿さまのお言ひつけによつて、携へ歸りました敵將の兜でござ

います。湊川の激戰中、お討死以前の御戰利品だと承ります。……御覽遊ばせ。前立は丸に二つ引き。まさしく逆賊が血緣の者の着料に相違ございません。これをお持たせの御趣意は、『二六時中片時たりともこの兜の主たる足利を忘るゝな。』といふ御遺訓なのでございますぞ。まことに君父の敵とは、誓つて共に天を戴くまいと願ふのが人間の本來性でございます。一念この事に及んでは、おのが力の足る、足らんを思ふ道なぞはないはずでございます。憎むべき朝敵の誅伐を、ひとへにお務めのやうに思召すのは、大きな思ひちがひでございませう。

恩地「正武が申します通り、人間の業の成る成らんは、畢竟念

力一つでございます。すなはちこれをしないではをられないといふ念力が肝腎でございます。彼の建武中興の御大業も、ひとへに爲さざるに忍びざるの御念力の爲す所でございましたのです。

和田「成ると成らざるとは天命です。お母上さまの御教訓とても、その道理を仰せられたのに外ならんと心得ます。早速お考へなほし遊ばして……

恩地「お母さまへお詫遊ばせ。

和田「速に御改心遊ばすがよろしうございます。

多聞丸尚うつむいてゐる。

奥方「多聞丸。もう一度聞きます。返辭をなさい。

と、きつと言ふ。多聞丸涙を拂つて顔を上げる。

多聞「お母さま、恐れ入りました。全くわたくしは心得ちがひをしてをりました。只今から心を入れかへますから、どうぞお赦し下さいませ。

奥方「では、きつと御遺訓を守つて、朝廷のために盡くしますか？

和田「逆賊誅伐の御決心がつきましたか？

多聞「正八幡宮に誓ひまして、きつと守りまする。

奥方（靜かに）「感心！それでこそお父さまの子です。（和田、恩地に、ふたりとも喜んで下さい。（と言ひつゝ涙聲になり）さぞ尊靈にもおよろこびだらう。

和田「さぞかし御滿足でございませう。

と皆々嬉し涙にくれる。

（逍遙選集）

逍遙選集
第九卷。七九二頁―八〇一頁。大正十五年十一月、春陽堂發行。

女子國文大綱　卷三　終

常用漢字及略字

（臨時國語調査會決定）

（一）常用漢字（千九百六十二字）

【一】一丁七丈三上下不世丙並【丨】中【丶】丸主【ノ】久乏乗【乙】乙九乞也乳亂【亅】了事【二】二云互五井【亠】亡交京亭【人】人仁仇今介仕他付仙代令以仰仲件任企伊伏伐休伯伴伺似但位低住佐何余佛作使來例侍供依侮候侵便係促俊俗保俠信修俳俵俸倂倉個倍倒候借倫假偉偏停健側偶傍傑備催働傳債傷傾僅像僚僞僧價儀億儉儒償優【儿】元兄充兆兇先光兌免兒兎【入】入内全兩【八】八公六共兵具典兼【冂】冊再【冖】冠【冫】冬冷凉凖凌凍凝【几】凡【凵】凶凸凹出【刀】刀刃分切刈刊刑列初判別利到制刷券刺刻則削前剛副割創劇劍劑【力】力功加劣助努効勅勇勉動勤務勝勞募勢勤勳勵勸【勹】勺匁包【匕】化北【匚】匹區【十】十千升午半卑卒卓協南博【卜】占【卩】印危却卵卷卽卿【厂】厄厘厚原【厶】去參【又】及友反叔取受叛【口】口古句叫召可叱史右司各合吉同名后吏吐向君呑吟否含呈吸吹告周味呼命和咽哀品員哲唐唱商問啓善喉喜喪單嗣嘉嘗器噴嚴囑【囗】囚四回因困固國圍園圓圖團【土】土在地坂均坊坐坑坪垂型垣埋城域執培基堀堂堅堤堪報場塔塗塚塵境墓墜增墨墮壁壇壓壞【士】士壯壹壽【夂】夏【夕】夕外多夜夢【大】大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮【女】女奴好如妃妊妙妨妹妻妾姉始姑姓委姦姪姫姻姿威娘娯娠婚婦婿媒嫁嫉嫡嫌孃【子】子字存孝季孤孫學【宀】宅宇守安完宗官定宛宜客宣室宮宰害宴家容宿寄密富寒察寡寢實審寫寛寶【寸】寸寺卦射將專尉尊尋對導【小】小少尚【尢】就【尸】尺尼尾尿局居屆屈屋展層履屬【山】山岡岩岬岳岸峠峯島峡崇崎崩嶮【巛】川州巡巣【工】工左巧巨差【己】己【巾】市布帆希帖帝帥師席帳帶常帽幅幕幣【干】干平年幸幹【幺】幻幼幾【广】床序底店府度座庫庭庶康廉廊廟廢廣廳【廴】延廷建廻【廾】弄弊【弋】式【弓】弓弔引弘弟弱張强

彈【彡】形彩彫影【彳】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復循微徵德徹【心】
心必忌忍志忘忙忠快念
忽怒思怠急性怨怪怯恐
恥恨恩恭息悅悔悟患悲
悼情惑惜惠惡惰惱想愁
愉意愚愛感慈態慕慘慢
慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戈】戒我 戒戚 戰戲 戴
【戶】戶戻房所【手】手才
打托扱扶批承技抑投抗
折抱抵押抽拂拍拒拓拔
拘拙招拜括拳拾持指振
捌捕捧捨掃授掌排掘掛
採探控推揚接提換握揭
揮援損搖搜摘携摩撫擇
擊操擔據擬擴攝【支】支
【攴】收改攻放政故效敍
敎敏救敗敢散敬敵敷數
整【文】文【斗】斗料斜
【斤】斤斥斬新斷【方】方
施旋旅族旗【无】既【日】
日旦旨早旬旭昇昌明易
昔星春昨是時晩晝普景
晴晶智暇暖暗暑暮暴曆
曇曜【曰】曲更書曹曾替
最會【月】月有朋服朕朗
望朝期【木】木未末本札
朱机朽杉李材村杖束柿
杯東松板枕林枚果枝枯
架柄某染柔査柩柱柳栗
校株根格栽桃案桐桑桶
梅條梨梯械棄棋棒棚棟
森棺植楠業極榮構概樂
樋樓標樞模樣樹橋機橫
檄檜檢櫻欄權【欠】次欲
款欺歌歎歐歡【止】止正
此步武歲歷歸【歹】死歿
殊殉殖殘【殳】段殺殼殿
毀【毋】母每毒【比】比
【毛】毛毫【氐】氏民【气】
氣【水】水氷永汁求汗汚
江池決汽沈沒沖沙河沸
油治沼沿況泉泊法波泣
泥注泰泳洋洗津洪洲活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑涙淡淨淫深混清淺
添減渡溫測港渴游湖湧
湯源準溝溢溶溺滅滋滑
滯滴滿漁漂漆漏演漕漠
漢漫漸潔潛湖澤激濁濃
濕濟濫濱瀧灌灣【火】火
灰災炊炎炭烈烏無焰然
煉煎煮煙煤照煩熊熟熱
燃燈燒營燭爆爐【爪】爪
爭爲爵【父】父【片】片版
牌牒【牙】牙【牛】牛牧物
牲特犧【犬】犬犯狀狂狐
狩狹狼猛猫猶猿獄獨獲
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理琴
【瓜】瓜【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【甲】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畔畜畝略番畫異留當
疊【疋】疋疎疏疑【疒】疫
疲疾病症痕痘痛痢療
【癶】登發【白】白百的皆
皇【皮】皮【皿】皿盆益盛
盜盟盡監盤【目】目盲直
相省眉看眞眠眺眼着睡
督睦瞭【矢】矢知短【石】
石砂砲破研硬硯碁碎碑
確磁磨礎【示】示社祈祕
祖祝神票祭禁禍福禦禮
【禾】秀私秋科秒租秤秩
移稅程稚種稱稻稼稿穀
積穗穩【穴】穴究空穿突
窃窒窓窮【立】立章童端
競【竹】竹竿笑笛笠符第
筆等筋筒答策箇算管篇
箱節範築篤簡簿籍【米】
米粉粒粘粗粟粹精糖糞
【糸】系紀約紅紋納純紗
紙級紛素紡索紫累細紳
紹紺終組結絕絞絡給統
絲絹經綠維綱網綴綻綿
緊緒線締緣編緩緯練縛
縣縫縮縱總績繁織繕繪
繭繰繼纂續【缶】缺【网】
罪置署罰罵罷羅【羊】羊
美羣義【羽】羽翁翌習翼
【老】老考者【而】耐【耒】
耕【耳】耳耽聖聘聞聯聲
職聽【肉】肉肋肖肝股肥
肩肯育肴肺胃背胎胞胴
胸能脂脇脈脊脚脫腎腐
腕腦腰腸腹腺膏膚膜膝
膳膽臆臟【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【臼】臼與舅興擧舊【舌】
舌舍【舛】舞【舟】舟航般
舵舶船艇艘艦【艮】良
【色】色【艸】芋芝花芽芳
苑苗若苦英茂茶草荒荷
莊莖菊菌菓菜華萩萬落
葉著葬蒔蒙蒸蓄蓮蔓蔭
薄薦薪藍藏藝藤藥蘇
【虍】虎虐處虛虜號【虫】
蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶蠻
【血】血衆【行】行術街衝
衡衞【衣】衣表衰袂袋袖
被袴裁裂裏裕補裝裸製
複褒【西】西要覆【見】見
規視親覺覽觀【角】角解
觸【言】言訂計討訓託記
訟訪設許訴診詐詔評詞
詠詣試詩詰話詳誅誇誌
認誓誕誘語誠誤誦說課
誼調談請諒論諫諭諸諾
謀謁謂謙講謝謠謹證識
譜警譯議護譽讀變讓
【谷】谷【豆】豆豊【豕】豚
象豪豫【貝】貝貞負財貢
貧貨販貫責貯貳貴買貸
費貿賀賃賄資賊賑賓賜
賞賢賣賤賦質賴購贈贊
【赤】赤赦【走】走赴起超
越趣【足】足距跡路踊踏
蹟蹴躍【身】身【車】車軌
軍軒軟軸較載輔輕輝輩
輪輸與轉【辛】辛辨辭辯
【辰】辰農【辵】辷辻迎近
返迫迭述迷追退送逃逆
透逐途通速造逢連週進
逸遂遇遊運過道達違遙
遞遠遣適遭遲遷選遺避
還邊【邑】那邦邪邸郊郎
郡部郵都鄕【酉】酌配酒
酢酬酷酸醉醜醫【釆】釋
【里】里重野量【金】金釜
釘針釣鈍鈴鉛鉢銀銃銅
銘鋭鋒鋼錄錢錦鍋鍛鎌
鎖鎭鏡鑄鐘鐵鑑鑛【長】
長【門】門閉開閏閑問閣
閲關【阜】防附降限陛院
陣除陪陳陰陵陶陷陸陽
隅隆隊階隔隙際障隣隨
險隱【隹】隻雀雄雅集雇
雌雙雜離難【雨】雨雪雲
零雷電需震霜霞霧露靈
【靑】靑靜【非】非【面】面
【革】革靴鞍【音】音響
【頁】頂頃項順須頓預頑
頒領頭頻題額顏願顚類
顧顯【風】風【飛】飛飜
【食】食飢飲飯飾養餓餘
餅館饉【首】首【香】香

【馬】馬馳駁駄駐騎騰騒　驅驕驗驚驛【骨】骨髓體　【高】高【髟】髮【鬥】鬭

【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮鯉　鯛鰹【鳥】鳥鳩鳴鶴鶏　【鹵】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥

【麻】麻【黄】黄【黒】黒默　點黨【鼓】鼓【鼠】鼠【鼻】　鼻【齊】齊齋【齒】齒齡

【龍】龍【龜】龜

注意

(一)本表にない漢字は假名で書くこと　(二)固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、たゞし外國(支那を除く)の人名地名は假名書きすること　(三)代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと　(四)外來語は假名で書くこと

(二) 常用略字 (百五十四字、下の小字は字典體)

勧勸 権權 潅灌 歓歡 観觀　沢澤 択擇 訳譯 駅驛 釈釋　変變 恋戀 蛮蠻 湾灣 茎莖　径徑 経經 軽輕 併倂 塀塀　瓶甁 餅餠 研硏 斉齊 斎齋　済濟 剤劑 残殘 浅淺 賎賤　銭錢 労勞 営營 栄榮 学學　覚覺 挙擧 誉譽 断斷 継繼　歯齒 齢齡 湿濕 顕顯 窓窗　総總 属屬 嘱囑 為爲 偽僞

帯帶 滞滯 参參 惨慘 両兩　満滿 発發 廃廢 鼡鼠 猟獵　乱亂 辞辭 潜潛 賛贊 赱走　徒徒 従從 縦縱 悩惱 脳腦　処處 拠據 担擔 胆膽 来來　麦麥 寿壽 鋳鑄 数數 楼樓　楽樂 薬藥 読讀 続續 竜龍　滝瀧 随隨 髄髓 庇鹿 麗麗　聴聽 廰廳 虚虛 戯戲 遅遲　觧解 独獨 触觸 畳疊 摂攝

虫蟲 蚕蠶 仮假 児兒 刻刻　励勵 甞嘗 国國 囲圍 円圓　図圖 壱壹 実實 写寫 宝寶　扣控 叙敍 条條 様樣 帰歸　気氣 炉爐 犠犧 献獻 画畫　畄畱 尽盡 礼禮 称稱 糸絲　欠欽 声聲 台臺 旧舊 万萬　号號 証證 豊豐 弁辨辯 逓遞　辺邊 医醫 鉄鐵 関關 双雙　霊靈 余餘 舘館 体體 鬪鬭

塩鹽 点點 党黨 亀龜

推量			めり	める	めれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量			まし	まし	ましか		未然ニ
推量			(らし)	(らし)	(らし)		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量	らしく	らしく	らし	らしき	らしけれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
打消			じ	じ	じ		未然ニ
打消	ず	ず	ず	ぬ	ね		未然ニ
打消	ざら	ざり	ざり△	ざる	ざれ	ざれ	未然ニ
指定詠歎	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	指定ハ體言又ハ連體ニ、詠歎ハ終止ニ
希望	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ		未然ニ
希望	たく	たく	たし	たき	たけれ		連用ニ
比況	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき			連體・が・のニ

推量	さうだら	さうだつ	さうだ				連用・連體ニ
推量	さうでせ	さうでし	さうです				連用・連體ニ
推量		さうで					連用・連體ニ
推量	らしく	らしく らしう	らしい	らしい	らしけれ		終止ニ
推量			まい				四段ハ終止、他ハ未然ニ
打消		なく	ない	ない	なけれ		未然ニ
打消		ず	ぬ ん	ぬ ん	ね		未然ニ
指定	でせ	でし	です				體言ニ
指定	なら				なれ		連體・體言ニ
指定	だら	だつ	だ				體言ニ
希望	たく	たく	たい	たい	たけれ		連用ニ
比況推量	やうなら	やうに		やうな	やうなれ		連體・が・のニ
比況推量	やうだら	やうだつ	やうだ				連體・が・のニ
比況推量	やうでせ	やうでし	やうです				連體・が・のニ
比況推量		やうで					連體・が・のニ

備考△印ハ實際ニ用ヒヌモノ、括弧內ノモノハ古文體ニ用フルモノ
＊か變ニハこし・こしか・きし・きしか・さ變ニハせし・せしか・しきト連ナル

文語口語活用表

平林治徳編

女子國文大綱附錄

文語動詞活用表

種類	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	備考
四段	咲	か	き	く	く	け	け	か・が・さ・た・は・ば・ま・ら ノ八行アリ
	降	ら	り	る	る	れ	れ	有り・居り・侍りノ三語居リハ四段トスルヲ得
ら變	有	ら	り	り	る	れ	れ	
な變	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	死ぬ・往ぬノ二語、死ぬハ四段トスルヲ得
か變	(來)	こ	き	く	くる	くれ	こ(よ)	一語ノミ
さ變	(爲)	せ	し	す	する	すれ	せ(よ)	一語ノミ
上二	起	き	き	く	くる	くれ	き(よ)	き・ぎ・ち・ぢ・ひ・び・み・い・りノ九行アリ
	用	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひ(よ)	
	恨	み	み	む	むる	むれ	み(よ)	恨むハ四段トスルヲ得
	試	み	み	む	むる	むれ	み(よ)	
上一	(射)	い	い	いる	いる	いれ	い(よ)	射る・鑄る・着る・似る・煮る・干る・見る・惟みる・顧みる・鑑みる・試みる・居る・率る・率ゐる・用ゐる
下二	(得)	え	え	う	うる	うれ	え(よ)	次清音ノ行以外清濁トモ各行皆アリ
下一	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	け(よ)	一語ノミ

文語形容詞活用表

種類	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
く活	高	く	く	し	き	け		
しく活	美	しく	しく	し	しき	しけれ		惡し・勇ましナドノ終止形ハ惡しく・勇ましトスルヲ得

文語助動詞活用表

種類	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身可能尊敬	れ	れ	る	るる	るれ	れ(よ)	四段・な變・ら變ノ未然ニ
受身可能尊敬	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られ(よ)	右以外ノ未然ニ
使役尊敬	せ	せ	す	する	すれ	せ(よ)	四段・な變・ら變ノ未然ニ
使役尊敬	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ(よ)	右以外ノ未然ニ
使役尊敬	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ(よ)	未然ニ
可能推量	べく	べく	べし	べき	べけれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
可能推量	べからべかり	べかり△					連用ニ、米か變さ變ニハ特殊ノ接續チナス
過去	き	き	し	しか			
過去詠歎	(けら)(けり)	けり	ける	けれ			連用ニ
完了	て	て	つ	つる	つれ	て(よ)	連用ニ
完了	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	連用ニ、死ぬニハ今連ネズ
完了	(ら)(り)	り	る	(れ)			さ變ノ未然四段ノ已然ニ
完了指定	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	完了ハ連用、指定ハ體言ニ
未來推量		む	む	む	め		未然ニ
推量		らむ	らむ	らむ	らめ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量		けむ	けむ	けむ	けめ		連用ニ
推量		めり	めり	める	めれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量		まし	まし	ましか			未然ニ
推量		(らし)	(らし)				終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量		らしく	らし	らしき	らしけれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量		まじく	まじ	まじき	まじけれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
打消		じ	じ	じ			未然ニ
打消		ず	ず	ぬ	ね		未然ニ
指定詠歎	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	指定ハ體言又ハ連體ニ、詠歎ハ終止ニ
希望	まほしく	まほし	まほし	まほしき	まほしけれ		未然ニ
希望	たく	たく	たし	たき	たけれ		連用ニ
比況	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	ごとけれ		連體ニ、のニ

口語動詞活用表

種類	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	備考
四段	咲	か	き	く	く	け	け	
	降	ら	り	る	る	れ	れ	
	有	ら	り	る	る	れ	れ	
	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	
か變	(來)	こ	き	く	くる	くれ	こい	
さ變	(爲)	せし	し	する	する	すれ	せよ(ろ)し(ろ)	
上一	起	き	き	きる	きる	きれ	きよ(ろ)	
	用	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ(ろ)	
	恨	み	み	みる	みる	みれ	みよ(ろ)	恨むハ四段ニモ用フ
	試	み	み	みる	みる	みれ	みよ(ろ)	
	(射)	い	い	いる	いる	いれ	いよ(ろ)	
下一	(得)	え	え	える	える	えれ	えよ(ろ)	
	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ(ろ)	

口語形容詞活用表

種類	語幹	未然	連用	終止	連體	已然	命令	備考
く活	高	く	く	い	い	けれ		
しく活	美	しく	しく	しい	しい	しけれ		けれ・しけれハ口語ニテハ未然・已然ノ差ナケ條件チ示スノミ

口語助動詞活用表

種類	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身可能尊敬	れ	れ	れる	れる	れれ	れ(よ)(ろ)	四段ノ未然ニ
受身可能尊敬	られ	られ	られる	られる	られれ	られ(よ)(ろ)	四段以外ノ未然ニ
使役尊敬	せ	せ	せる	せる	せれ	せ(よ)(ろ)	四段ノ未然ニ
使役尊敬	させ	させ	させる	させる	させれ	させ(よ)(ろ)	四段以外ノ未然ニ
使役尊敬	しめ	しめ	しめる	しめる	しめれ	しめ(よ)(ろ)	未然ニ
尊敬	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ	連用ニ
完了過去	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	連用ニ
未來推量		う	う				四段ノ未然ニ
未來推量		よう					四段以外ノ未然ニ
推量	さうなら	さうに	さうな	さうなる	さうなれ		連用・連體ニ
推量	さうだら	さうだつ	さうだ	さうだる	さうだれ		連用・連體ニ
推量	さうでせ	さうでし	さうです				連用・連體ニ
推量		さうで					連用・連體ニ
推量	らしく	らしい	らしい	らしい	らしけれ		終止ニ
推量		まい					四段ハ終止、他ハ未然ニ
打消		なく	ない	ない	なけれ		未然ニ
打消		ず	ぬ	ぬる	ぬれ		未然ニ
指定	でせ	でし	です				體言ニ
指定	だら	だつ	だ				體言ニ
指定	なら				なれ		連體・體言ニ
希望	たく	たく	たい	たい	たけれ		連用ニ

文語形容詞活用表

ら變	有	ら	り	る	れ	有り・居り・侍りノ三語居りハ四段トスルヲ得	死ぬ・往ぬノ二語、死ぬハ四段トスルヲ得	有り・居り・侍りノ三語居りハ四段トスルヲ得
な變	死	な	に	ぬ	ぬれ	ぬ		死ぬ・往ぬノ二語、死ぬハ四段トスルヲ得
か變	(來)	こ	き	く	くる	くれ	こ(よ)	一語ノミ
さ變	(爲)	せ	し	す	する	すれ	せ(よ)	一語ノミ
上二	起	き	き	く	くる	くれ	き(よ)	き・ぎ・ち・ぢ・ひ・び・み・い・りノ九行アリ
	用	ひ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひ(よ)	
	試 恨	み	み	む	むる	むれ	み(よ)	恨むハ四段トスルヲ得
上一	(射)	い	い	いる	いる	いれ	い(よ)	射る・鑄る・着る・似る・素る・干る・見る・惟みる・顧みる・鑑みる・試みる・居る・率る・率ゐる・用ゐる
下二	(得)	え	え	う	うる	うれ	え(よ)	次清音ノ行以外清濁トモ各行皆アリ
下一	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	け(よ)	一語ノミ

く活	高	く	く	し	き	け		
しく活	美	しく	しく	し	しき	しけれ		惡し・勇ましナドノ終止形ハ惡しし・勇ましトスルヲ得

文語助動詞活用表

種類	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身可能尊敬	れ	れ	る	る	れ(よ)	四段・な變・ら變ノ未然ニ	右以外ノ未然ニ
受身可能尊敬	られ	られ	らる	らる	られ(よ)	四段・な變・ら變ノ未然ニ	右以外ノ未然ニ
使役尊敬	せ	せ	す	する	すれ	せ(よ)	右以外ノ未然ニ
使役尊敬	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ(よ)	右以外ノ未然ニ
使役尊敬	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ(よ)	未然ニ
可能推量	べく	べく	べし	べき	べけれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
可能推量	べからべかり	べかり△					終止ニ、ら變ニハ連體ニ
過去	き	し	き	しか			連用ニ、※か變さ變ニハ特殊ノ接續ヲナス
過去詠歎	(けら)(けり)	けり	ける	ける	ける		連用ニ
完了	て	て	つ	つる	つれ	て(よ)	連用ニ
完了	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	連用ニ、死ぬニハ今連ネズ
完了	(ら)	(り)	り	る	(れ)		さ變ノ未然四段ノ已然ニ
完了指定	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	完了ハ連用、指定ハ體言ニ
未來推量		む	む	む	め		未然ニ
推量	らむ	らん	らむ	らむ	らめ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量	けむ	けん	けむ	けむ	けめ		連用ニ
推量	めり	めり	めり	める	めれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量	まし	まし	まし	ましか			未然ニ
推量	(らし)	(らし)	(らし)				終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量	らしく	らし	らし	らしき	らしけれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
推量	まじく	まじ	まじき	まじき	まじけれ		終止ニ、ら變ニハ連體ニ
打消		じ	じ	じ			未然ニ
打消	ず	ず	ず	ぬ	ね		未然ニ
打消	ざら	ざり△	ざり	ざる	ざれ	ざれ	未然ニ
指定詠歎	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	指定ハ體言又ハ連體ニ、詠歎ハ終止ニ
希望	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ		未然ニ
希望	たく	たく	たし	たき	たけれ		連用ニ
比況	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき			連體・が・のニ

備考△印ハ實際ニ用ヒヌモノ、括弧内ノモノハ古文體ニ用フルモノ
※か變ニハこし・こしか・きし・きしか・さ變ニハせし・せしか・しきト連ナル

口語形容詞活用表

ら變	有	な	り	る	れ	有り・居り・侍りノ三語居りハ四段トスルヲ得	死ぬ・往ぬノ二語、死ぬハ四段トスルヲ得	有り・居り・侍りノ三語居りハ四段トスルヲ得
な變	死	な	に	ぬ	ぬる	ぬる	ぬれ	死ぬ・往ぬノ二語、死ぬハ四段トスルヲ得
か變	(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こ(い)	
さ變	(爲)	せ	し	する	する	すれ	せ(よ) し(ろ)	
上一	起	き	き	きる	きる	きれ	き(ろよ)	恨むハ四段ニモ用フ
	用	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひ(ろよ)	
	試 恨	み	み	みる	みる	みれ	み(ろよ)	
	(射)	い	い	いる	いる	いれ	い(ろよ)	
下一	(得)	え	え	える	える	えれ	え(ろよ)	
	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	け(ろよ)	

く活	高	く	く	う	い	い	け	
しく活	美	しく	しく	しう	しい	しい	しけれ	

けれ・しけれハ口語ニテハ未然・已然ノ差ナク條件ヲ示スノミ

口語助動詞活用表

種類	未然	連用	終止	連體	已然	命令	接續
受身可能尊敬	れ	れ	れる	れる	れれ	れ(よ)	四段ノ未然ニ
受身可能尊敬	られ	られ	られる	られる	られれ	られ(ろよ)	四段以外ノ未然ニ
使役尊敬	せ	せ	せる	せる	せれ	せ(よ)	四段ノ未然ニ
使役尊敬	させ	させ	させる	させる	させれ	させ(ろよ)	四段以外ノ未然ニ
使役尊敬	しめ	しめ	しめる	しめる	しめれ	しめ(ろよ)	未然ニ
尊敬	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ	連用ニ
完了過去	たら	たり	た	た	たれ		連用ニ
未來推量			う				四段ノ未然ニ
未來推量			よう				四段以外ノ未然ニ
推量	さうなら	さうに		さうな	さうなれ		連用・連體ニ
推量	さうだら	さうだっ	さうだ				連用・連體ニ
推量	さうで	さうでし	さうです				連用・連體ニ
推量							連用・連體ニ
推量	らしく	らしう	らしい				終止ニ
推量							四段ハ終止、他ハ未然ニ
打消			ない	ない	なけれ		未然ニ
打消	ず	ぬん	ぬん	ぬ	ね		未然ニ
指定	でせ	でし	です				體言ニ
指定	なら				なれ		連體・體言ニ
希望	たく	たく	たい	たい	たけれ		連用ニ
比況推量	やうなら	やうに		やうな	やうなれ		連體・が・のニ
比況推量	やうだら	やうだっ	やうだ				連體・が・のニ
比況推量	やうでせ	やうでし	やうです				連體・が・のニ
比況推量	やうで						連體・が・のニ

昭和五年九月八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

昭和四年十月五日 印刷
昭和四年十月十日 發行
昭和五年八月十五日 修正印刷
昭和五年八月二十日 修正發行

女子國文大綱
定價 卷一—卷十 各金六十九錢

著作 平林治德

編者 大阪市南區安堂寺橋通三丁目四十五番地 立川熊次郎

發行者 大阪市西區阿波座二番町三番地 北隅茂

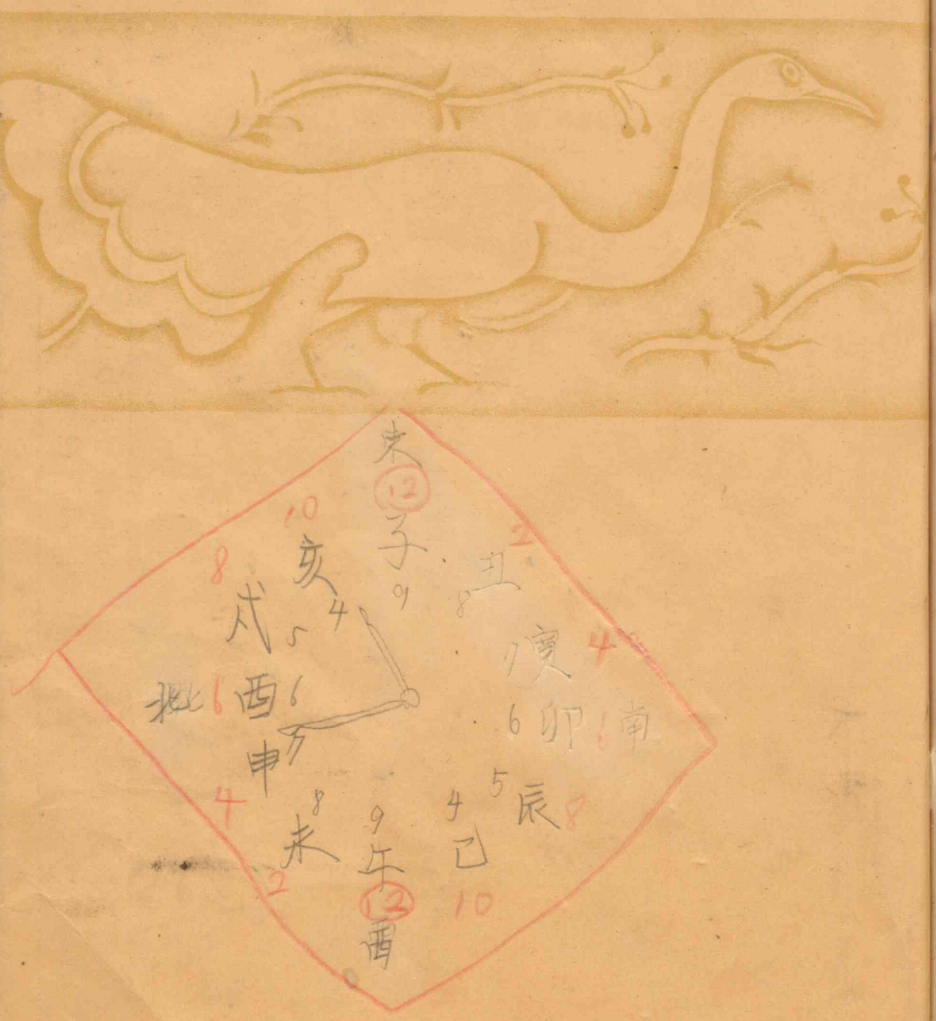
印刷者 大阪市南區安堂寺橋通三丁目四十五番地 立川書店
振替口座（大阪一四六一番）

發行所

小店發行の教科書は常に多數の製本準備してありますから萬一各地賣捌所に賣切の場合課業に御差支の節は直接御註文下さい直ぐ御送り致します

第二學年五組

大野春美



木
今週
土
文法作文

二A

丸矢久子